



NPOと企業が結ぶ 次世代、異世代、森づくり

「花王・みんなの森の応援団」の軌跡

森を育て、
私も育つ



NPO、企業、学生レポーターが協働した、10年間の活動をまとめました。



ごあいさつ	02
「花王・みんなの森の応援団」とは	04

プログラム成果から見てきたこと ～4つの変化と成長～	05
-------------------------------------	----

1. 主体的に責任を持つという変化
2. 異世代がお互いにもたらした変化
3. 取材・記事の執筆・発信が起こした変化
4. 関係者の巻き込みが「創発」に変化

「花王・みんなの森の応援団」再訪問レポート	15
-----------------------------	----

- | | |
|----------|---|
| Report 1 | 市民・企業・行政・NPOの協働が活動継続に
／坂部 布実 |
| Report 2 | 地域コミュニティの中で根付く、”無理なく、楽しく、
やってみる”森づくり活動／飯田 貴也 |
| Report 3 | 森に囲まれた子育て ～豊かな森と、
大人の暖かいまなざしに触れて～／朝崎 千秋 |
| Report 4 | よこすかの森での成長と気づき
～「1000年の森」での再会を通して～／村重 直佑 |
| Report 5 | 「変わらない」が継続につながる花咲jiiの
活動の魅力／鈴井 美穂 |

みんな座談会	36
関係者からのコメント	37
学生レポーター参加者と取材実績	38



NPOと企業が結ぶ 次世代、異世代、森づくり

「花王・みんなの森の応援団」の軌跡



「みんなの森の応援団」をこれからの活動の財産に

花王は、よきモノづくりを通じて、豊かな生活文化の実現に貢献することを企業の使命にしています。事業活動とともに、よき企業市民として社会に貢献し、持続可能な社会を次世代に引き継ぎたいと考え、「次世代を育む環境づくりと人づくり」をテーマに、環境、教育、コミュニティを重点領域とし、社会貢献活動に取り組んでいます。

花王では、2000年より、日本国内の地域の緑を地域の市民の手で守り育てる活動を支援したいと「花王・みんなの森づくり活動」を行っています。活動を継続していく過程で、「花王・みんなの森づくり活動」は、環境保全のみならず、現代の社会の抱える様々な課題、例えば、少子高齢化や核家族化、異世代間交流の希薄さ、などを解決し、より良いコミュニティづくりにも影響を及ぼしていることがわかってまいりました。一方で、「花王・みんなの森づくり活動」で支援している市民活動団体は、メンバーの高齢化や広報力不足などの課題を抱えていることも見えてまいりました。

そこで、「花王・みんなの森づくり活動」の価値をより高めることが、より良い環境づくりと地域コミュニティづくりの両方の課題解決に繋がると考え、2006年、「花王・みんなの森の応援団」を開始しました。

この活動では、様々なセクターや年代のハブとなり得るのが大学生なのではないかと考えました。花王は、生活の身近にある商品を扱う企業で、つねに現場を大切にしています。大学生にも現場を大切にしてもらいたいと、「レポーター」という役割を担い、現場に深く入り込み、大学生のフレッシュな視点で団体の魅力を発見、発信していくことを期待しました。結果、大

学生が新しい風を吹き入れることで、団体の活動の活性化や見直しに繋がり、大学生にとっても、異世代の方との交流、企業の活動や市民活動の知識を得るなど大きな学びとなりました。また、花王にとっても、大学生や市民活動団体の皆様方に、花王という企業への理解を深めていただける機会となりました。市民活動団体・NPO、大学生、企業それぞれに価値を提供し、それぞれが成長できる活動となりました。

2011年の東日本大震災を契機に、企業の社会貢献活動、コミュニティのあり方、市民活動やボランティアのあり方などが大きく変化しています。特に、社会課題解決に向けては、多様なセクターの連携が一層重要視されるようになってきています。この、「花王・みんなの森の応援団」の活動で得た、多様なセクターとの連携のモデルを、今後の社会貢献活動を進めていく上での、大きな財産としてまいりたいと思います。

このたび、10年を迎え、「花王・みんなの森の応援団」のこれまでの活動を振り返り、ここに成果をまとめました。ぜひ、ご一読いただき、花王の社会貢献活動への理解を深めていただければ幸いです。

最後になりますが、10年間のプログラム運営にあたりまして、ご支援ご協力いただきました、日本NPOセンターの皆様、大学生を快く受け入れてくださった市民活動団体の皆様、運営に関わってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。そして、貴重な大学生活の一コマを使って、この活動に参加してくれた86名の大学生の今後のご活躍を心より応援したいと思います。



高内 美和

花王株式会社
コーポレートコミュニケーション部門 社会貢献室長

変化と成長を実感できるプログラム「みんなの森の応援団」

本誌を手にとりくださった多くの方に「変化」を楽しみ、次に向かう「パワー」を感じていただけることを期待しています。

私たち日本NPOセンターは、民間非営利セクターに関する基盤的組織としてNPOの社会的基盤の強化を図り、市民社会づくりの共同責任者としての企業や行政との新しいパートナーシップの確立をめざし、1996年から活動を行っているNPOです。

私たちのような環境分野を専門としていないNPOが何故、花王株式会社とこのようなプログラムを実施し、本誌で何をお伝えしようとしているのか、あいさつに代えてご説明したいと思います。

日本NPOセンターは発足してまだ20年足らず。NPOという言葉の普及とともに多くの方に支えていただきながら日ごろの事業推進も進めており、会員の皆様との情報交換や意見交換を大切にしています。年に1度は会員企業の皆様のところに足を運び、さまざまな情報交換・意見交換を行っています。2005年のある日、花王株式会社に当時の事務局長と担当者が訪ねたところ以下のようなやりとりがありました。

＊

花王は実施している「花王・みんなの森づくり助成」について5年間実施する中で専門家に評価を依頼したところ「異世代交流を促進するとプログラムの価値がもっと高まる」と言われていた。日本NPOセンターは、2002年から実施していた全NPO法人が網羅されているデータベース「NPOヒロバ」のコンテンツを充実させることで、NPOの情報開示がもっと高まりNPOの信頼性を向上させたいと考えていた。そこで、大学生が団体の活動に参加して団体を紹介する記事を書くことによって、異世代交流

も次世代育成もさらに市民活動団体の基盤整備にもつながるようなプログラムができないかと話し合いを重ねた。

＊

そして、2006年度からこの「花王・みんなの森の応援団」プログラムを開始させたわけです。

今回、10年目を迎えるにあたり、どのような本誌を作り上げるかについても何度も何度も話し合いを重ねました。一般的に人材育成や異世代交流を目的とした事業の成果は数字では測りにくく、また数字で図るのが適切なことなのかどうかについても議論がなされているところです。このみんなの森の応援団が何を行ってきて、学生にどのような影響を与えたのか、団体にどのような影響を与えたのか、それが社会にとってどのような意味があるのか知りたいと思い、これまで得てきた応募用紙や毎年のアンケート、修了式での学生の言葉なども含めて全部洗いだしてみました。また、10年前記事を書いitてくださった学生のみなさんから2014年にレポーターになった学生の皆さんにもアンケートを行い、学生を受け入れてくださった団体の皆様にもアンケートをお願いしました。事業の成果分析の詳細は、この事業を10年間、専門家の目と日本NPOセンター役員の目と両方で支えた萩原なつ子さんに譲ります。ぜひ、最後まで読んでいただけますと幸いです。

とはいえ10年間、ともに創り全面的な資金支援をしてくださった花王株式会社のご協力がなければそもそもこのプログラムは生まれていません。花王株式会社にはこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、記事を書ってくれた学生の皆さん、温かく学生を迎え入れてくださった団体の皆さん、そしてなによりこのプログラムの推進を見守ってくださった皆様に御礼を申し上げたいと思います。



早瀬 昇

認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター 代表理事



「花王・みんなの森の応援団」とは

花王株式会社は公益財団法人都市緑化機構とともに、2000年より「花王・みんなの森づくり活動」に取り組み、これまでに、全国各地の森づくり活動に携わる、約400の団体へ支援を行なっています。

「花王・みんなの森の応援団」は、「花王・みんなの森づくり活動」で支援を行なってきた団体に学生が取材に行き、記事を掲載することによって、2つの応援を目的に実施しています。



活動に参加



取材風景

1つめは、森づくり活動の意義を広く知っていただき、団体を支援する輪を広げること。

2つめは、学生が森づくりに参加し、取材し、記事を書くことによって、学生自らの成長につなげること。

この2つの応援を実現するために、花王株式会社と認定特定非営利活動法人日本NPOセンターが協働で実施しました。プログラムの名称は「花王・みんなの森の応援団」としてはいますが、関係者では「みんもり」という通称※1を使い、応援に弾みをつけてきました。これまで87団体の取材活動へ86名の学生レポーター※2が参加しました。

「みんもり」の流れ

学生レポーターと市民活動団体、花王株式会社と日本NPOセンターが共同で実施

1

開校式と定例ミーティング

4月から環境活動に関心のある大学生を「学生レポーター」として公募決定し、6月頃にオリエンテーションを実施します。

定例ミーティングの内容

- ・取材に関する指導
- ・記事執筆に関する指導
- ・花王の環境活動の学習
- ・市民活動の学習
- ・過去の取材団体からの講演
- ・参加者同士の交流



2

学生レポーターによる取材

8月から学生レポーター10名は、2人1組のチームになり、各チーム2つの団体の活動に参加して取材を行います。

- ・取材先の決定
- ・質問項目の作成
- ・取材、活動参加日程の調整
- ・活動参加および取材



4

修了式

12月には、花王に学生レポーター、オリエンテーション講師、取材先の団体の方などが集まり、学生レポーターが、記事の内容や、活動を通して学んだことなどを発表します。

修了式での発表内容

- ・記事の概要発表
- ・取材、活動参加で学んだこと
- ・半年間で学んだこと



3

レポートの作成、公開

取材後、学生レポーターたちは記事の作成をします。取材した団体への確認や、記事を掲載するウェブサイトの関係者と打ち合わせを重ね、記事は公開されます。

- ・記事の執筆、推敲
- ・記事の編集、校正
- ・取材団体への事実確認



※1 本誌内でも「みんもり」という通称を箇所によって使用しています

※2 詳細は巻末の「学生レポーター参加者と取材実績」を参照ください

プログラムから 見えてきたこと —4つの変化と成長—

2006～2014年



「花王・みんなの森の応援団」10年間の軌跡の中で、学生レポーターの応募用紙やふりかえりシート、市民活動団体に対するアンケート等、数々のデータ(感想やコメント)を生の声として記録してきました。その蓄積されたデータを読み解き、社会的インパクトとして見えてきたことをまとめました。

.....
P7～13の円グラフは本誌作成にあたり過去学生レポーター、市民活動団体へアンケート調査を行った結果を数値化したものです。
.....

●学生レポーターへの追跡アンケート(2015年実施)

調査対象：86名

回答いただいた人数：38名

回答方法：「Creative Survey」を活用したWebアンケート

●過去に学生レポーターが取材・活動した

市民活動団体への追跡アンケート(2015年実施)

調査対象：85団体

回答いただいた団体数：52団体

回答方法：手紙、FAX、メールを活用したアンケート調査



主体的に責任を持つという変化

セルフ・エンパワメントの向上



これまでのデータから、多くの学生レポーターが、みんなでの経験が自身の成長や自信につながったと答えている。特に、記事作成スキルの向上や、人前での発表、一つの仕事をやり遂げる経験を通じて主体的に責任感を持つものごとに関わるようになったことが、大きな変化だったという結果が得られている。

学生レポーターの変化・成長

●相手に伝えたいことが届く文章を書けるようになった

データから得られた感想や気づき

- ・客観的な視点が身につくようになった
- ・文章を書くことが好きになった

そこから読み取れること

- ・読みやすい表現ができるようになった
- ・何を、いかに、どう伝えるか大切に書けるようになった
- ・文章を書くことに抵抗が無くなった

●必要な情報をうまく引き出すことができるようになった

- ・対話中のとっさのアドリブ、質問をした
- ・現在の生活に活かす点が多いと感じた
- ・先方情報を事前に集めるなど、取材準備を行った

- ・相手の話の流れに沿って臨機応変に情報を拾い出すことができるようになった
- ・丁寧にコミュニケーションをとることが現在の仕事に活かされるようになった

●情報を分かりやすく構成・編集できるようになった

- ・読む側の相手を意識した表現をこころがけた
- ・書きたい情報をいかに決められた字数内に収めるか四苦八苦した
- ・生き活きた自然な表情を撮るのが難しかった

- ・取材内容を読み手に分かりやすく伝えるための構成を考えられるようになった
- ・取材材料を取捨選択できるようになった
- ・ビジュアルで何を伝えるのかで写真を選択できるようになった

●相手に分かりやすく伝える力がついた

- ・自分の経験をわかりやすく簡潔に伝える練習ができた
- ・何を優先して話すべきか絞り込んで話した
- ・資料づくりだけでなく、発表の練習も大切だと思った

- ・何かを伝える際に話の組立てを考えるようになった
- ・時間などの制約に合わせて論理的に話す力がついた
- ・話し方、表情など考えて話すことができるようになった

●徹底した良い原稿作りにこだわることで、最後までやり遂げる自信につながった

- ・原稿チェックが何度もあって本当に大変だった
- ・一つのことに時間をかけて取り組むことから得られるものは大きいと実感した
- ・辛いことを乗り越えてやり遂げることで自信につながった

- ・辛いことを乗り越えてやり遂げることで自信につながった
- ・新しいことにチャレンジすることの大切さが自身の成長につながっていることに気づいた。

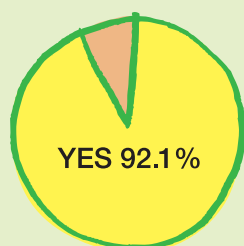
●自ら社会の中に飛び込んでいく経験を積むことで、度胸がついた

- ・電話一つかけるにも緊張したが、取材先に物怖じせずに連絡できるようになった
- ・修了式で取材先団体や企業の方の前でプレゼンした

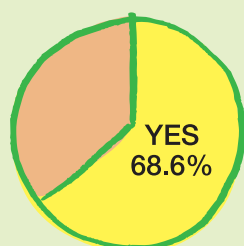
- ・初めての相手と話をするという度胸がついた
- ・人前で話すことに自信がついた
- ・学生の間に社会に出てからの入り口を体験することが出来た

学生レポーターへの追跡アンケートの集計結果より

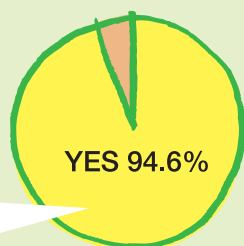
Q:インタビュー記事を書くという経験ははじめてでしたか?



Q:インタビュー記事を書く経験が現在のあなたの成長につながっている部分がありますか?

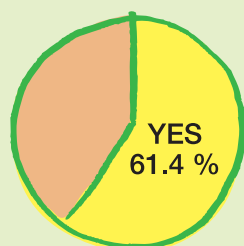


Q:インタビュー記事を書く際に難しいと印象に残っていることはありますか?

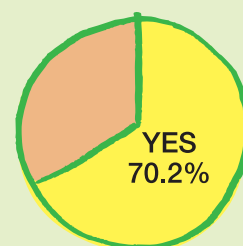


【例】わかりやすく伝えること、書き出し、感動・驚き等の表現、1番書きたいことを考えること、文の組立て、文章量と文字数制限

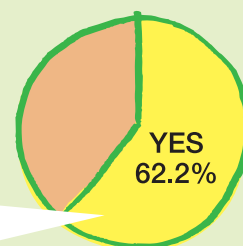
Q:取材・活動先にアポイントを取るなど、交渉を行う経験が現在のあなたの成長につながっている部分がありますか?



Q:インタビュー（取材）の経験が現在のあなたの成長につながっている部分がありますか

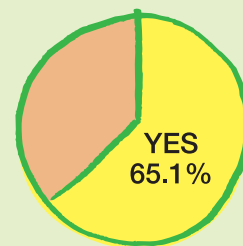


Q:取材写真を撮る際に難しいと印象に残っていることはありますか



【例】対象物に悟られないように自然に撮ること、一瞬の表情を逃さないこと、原稿と見合う写真の構図を考えること

Q:プレゼンの経験が、現在のあなたの成長につながっている部分がありますか?



●レポーター公募状況

年度	採用者	応募数
2006	8	8
2007	8	17
2008	10	25
2009	10	19
2010	10	24
2011	10	16
2012	10	27
2013	10	24
2014	10	37
合計	86	197

※2006年は公募ではなくすべて紹介による

●応募時おもな志望理由

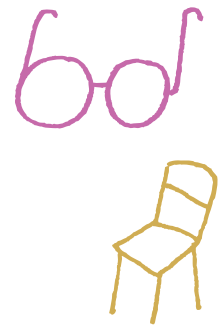
1位	32名	団体との交流から学びたい
2位	27名	自分の書いた記事を発信したい
3位	25名	取材スキルを磨きたい
4位	19名	自然・環境問題への関心があるため
5位	15名	未知の体験をしたい、視野を広げたい

※同一人物から複数の回答があった場合は重複してカウントしている



2

異世代が互いにもたらした変化



学生レポーターにとって、人生の先輩が多い市民活動団体への取材は、先入観で考えていたこととのギャップに気づき、相手を理解しようとする気持ちを育む機会となったようだ。市民活動団体にとっても、普段出会う機会の少ない大学生の参加により、自分たちの組織を客観的に捉えなおすきっかけとなり、活性化につながったという意見が出ている。

学生レポーターの変化・成長

●団体の方と交流することにより、違う価値観に触れるという学びがあった

データから得られた感想や気づき

- ・団体のメンバーの顔触れ(ご経歴)が多様で驚いた
- ・活動に対し「ねばならない」というよりも「やりたいからやっている」という自由な考え方に共感した
- ・市民活動に関わる人々に初めて出会った

そこから読み取れること

- ・異なる考えを持つ人同士が出会うことで生まれる新しいアイディアに価値を感じるようになった
- ・これまで接したことのない世代との交流から、考え方や価値観に広がりを持てるようになった

●世代を超えたコミュニケーションがうまくなった

- ・自分自身の人との接し方を改めて振り返る機会になった
- ・家族、親せき以外のご年配の方と話す機会を得た

- ・態度、言葉づかい、マナーを身につけた
- ・年上の方と物おじせずに話せるようになった

●自分の将来を描くきっかけになった

- ・人生の設計を考えるようになった。目の前の就職ではなく、60年後の自分を思い描くようになった
- ・自分が退職した後のことを考えるようになった

- ・人生の目標となる人と出会えた
- ・自分の将来について考えるようになった

●世代の違いによる相互理解は難しいという先入観が少なくなった

- ・次の世代である我々の将来を気にかけてくれている人がいるという有難さを感じた
- ・世代が上の皆さんは頭が硬いという先入観があったがとても気さくにかかわってくれた

- ・異世代に対する先入観と実際の印象が大きく変わるようになった

団体にとっての変化・広がり

●団体にとって、日々の活動を見直すきっかけとなった

- ・記事を会員に周知することであらためて会の発足の経緯や位置づけを共有できた
- ・記事が外部評価のようになって会員の自信となった

- ・団体を客観的に見直す機会となり、会の在り方、本来の目的など原点を見直すきっかけとなった

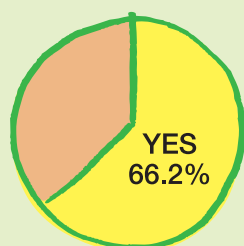
●若者の元気をもらうだけで団体が活性化した

- ・多くのメンバーが若者育成に通じる機会を得ることで活動にやりがいを感じた

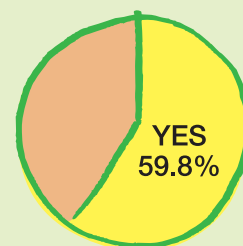
- ・学生に教えるということを通じて、メンバーのやりがいとなり団体の活気が上昇した

学生レポーターへの追跡アンケートの集計結果より

Q: 市民活動団体への活動参加があなたの成長につながっている部分がありますか？



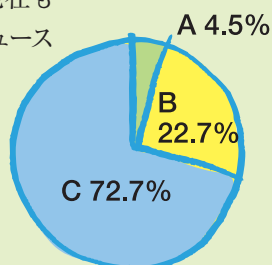
Q: 取材・活動先の異世代の方との交流があなたの成長につながっている部分がありますか？



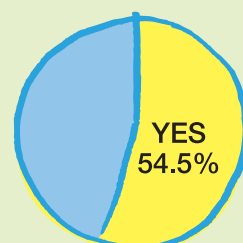
団体への追跡アンケートの集計結果より

Q: 当時訪問した学生と、現在もかわりがありますか？（ニュースレター、年賀状など広く）

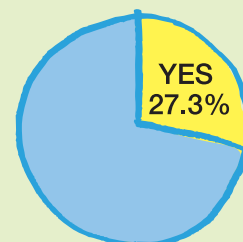
- A. 現在もつながりがある
- B. 今は無いが修了後何度かやり取りがあった
- C. 現在は全く無い



Q: 当時、大学生による訪問取材は初めてでしたか？



Q: 大学生が活動・取材に参加をして、貴団体に変化はありましたか？



変化があったとした団体からのコメント

- 他の大学からの問い合わせ（取材や調査）が増えるようになりました。
- 大学生が現地に来て、森に関心を持っていただいたことは有り難く思いました。関心を持っていただき士気は上がりました。
- より多くのボランティアスタッフが活動に参加するようになりました。
- 近隣の大学生に広報の協力を得るなど、これをきっかけに外へ発信する働きかけが始まりました。
- 外からの評価は会員の自信につながります。同じ活動でも自信を持って行えるようになりました。
- 記事を会員に周知することであらためて会発足の経緯や位置づけなどを共有できました。
- 記事を当会のPRの場で数回使用した。例えば、タウン情報誌の取材を受けた時にも資料として提供。これがきっかけで1名の入会がありました。
- おじいさん集団にとっては、晴天の霹靂、楽しい一日だったような気がします。
- こちらで作成した活動を物語にしたものを学生さんにシナリオづくりしてもらいました。それをもとに小学校5年生全員で森の中での演劇をしてくれることになりました。



取材・記事の執筆・発信が起こした変化



学生レポーターが森づくり活動に参加し、市民活動団体の紹介記事を発信することにより、彼ら自身の環境への意識を高めると同時に、森づくり活動だけでなく、市民活動全般への関心を高めることにつながった。また、発信された記事を通じて、その団体や活動に興味を持つステークホルダーが増え、市民活動団体の広報活動にも貢献した。



学生レポーターの変化・成長

●森づくりに対する関心が高まった

データから得られた感想や気づき

- ・「自然は大切」と当たり前と考えていたが、その「大切」の意味の重さを知った
- ・森林はどんな人がどんな方法で管理・保全をしているのかを意識するようになった

そこから読み取れること

- ・自然の尊さ、ありがたさに気付くようになった
- ・森づくりの仕組みや取組みの具体策を学び、関心を持つようになった

●身近な環境を意識するようになった

- ・普段通りの生活では気付けない発見があった
- ・自然に対し、離れた場所ではなく、自ら所属するコミュニティーの一部として捉えるようになった
- ・活動に参加して、里山の自然にふれることができた

- ・自分の住む街の環境について意識するきっかけとなった
- ・自然がある地域の良さに気付くようになった

●市民活動に対する関心が高まり、関わろうとする気持ちが生まれた

- ・崇高な理念に沿って活動しているイメージがあったが、意外と好きなことを楽しみながらやっていることを知り、むしろ好感が持てた
- ・自分も関わってみたいと考えるようになった

- ・当初持っていた市民活動に対するイメージが大きく変わった
- ・市民活動の動きに対する関心が高くなった

●市民活動の現場の雰囲気や課題を捉えられるようになった

- ・話を聞くだけでなく、活動現場に赴くことで五感を使って取材する大切さを知った
- ・「市民活動＝楽しい」だけではなく、現場ならではの苦労を知るようになった

- ・現場に入ることによって気づく団体の工夫や課題を知った
- ・市民活動の原点や原動力をより理解できるようになった

団体にとっての変化・広がり

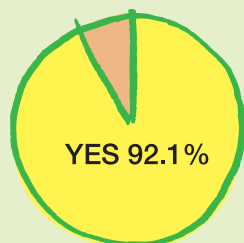
●市民活動団体の取組を社会に発信するきっかけになった

- ・記事を会の広報媒体の一つとして使用して自分達が何をやっている団体かを説明した
- ・記事を見た他の大学の学生から研究論文の取材依頼があった

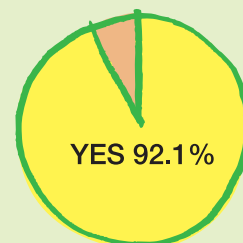
- ・初めて出会う人にも、記事を使って、団体の取組をわかりやすく説明できるようになった
- ・記事を通じて、これまで関わりの無かったところから注目されるようになった

学生レポーターへの追跡アンケートの集計結果より

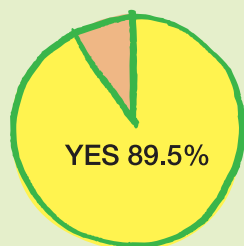
Q: 修了後、市民活動に対する関心が高まりましたか？



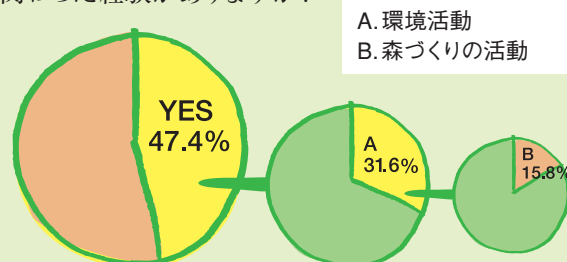
Q: 修了後、環境活動に対する関心が高まったと感じていますか？



Q: 修了後、森づくりの活動に対する関心が高まったと感じていますか？



Q: 修了後から現在までに市民活動に関わった経験がありますか？



環境に関する社会の動き

- 2000年 ●「花王・みんなの森づくり活動」スタート
国連ミレニアムサミット
- 2002年 ●ヨハネスブルグ・サミット(南アフリカ)
100万人のキャンドルナイト
●フロン回収破壊法施行
- 2003年 ●「持続可能な開発のための教育の10年」
推進会議発足
●環境保全活動・環境教育推進法制定
- 2005年 ●愛知万博で市民参加事業「地球市民村」
●ホワイトバンドキャンペーン
- 2006年 ●「花王・みんなの森の応援団」スタート
- 2008年 ●北海道洞爺湖サミット G8サミット
NGOフォーラム結成
- 2009年 ●生物多様性条約市民ネットワーク結成
- 2010年 ●生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)
開催(名古屋)
- 2011年 ●国連生物多様性の10年スタート国際森林年
- 2012年 ●国連持続可能な開発会議
(UNCSD: Rio+20) (ブラジル)
- 2015年 ●「花王・みんなの森の応援団—NPOと企業が
結ぶ次世代・異世代・森づくり」(本誌)発行
●気候変動枠組条約 第21回
締約国会議(COP21)パリ協定採択

日本での環境にかかわる 市民活動団体数の推移

2000年

約15,000団体

うち、森林保全を主に行う団体
917団体

うち、NPO法人61団体
うち、任意団体760団体

2015年

約18,000団体

うち、森林保全を主に行う団体
897団体

うち、NPO法人439団体
うち、任意団体400団体

出典：独立行政法人環境再生保全機構
環境NGO・NPO総覧オンラインデータベースを参考





関係者の巻き込みが「創発」に変化



創発とは、異質なものが協働することから意図しないままに生まれる価値のことを指す。学生レポーター、企業、NPOという異質なものが10年間協働してきたことにより、それぞれの間に新たな関係性の構築、互いへの意識の変化、当事者性の高まりなど、良い影響を及ぼし合い、さまざまな創発が起こった。



●テーマの異なる学生同士のつながりができた（学生レポーター×学生レポーター）

データから得られた感想や気づき

- ・学年の違う学生同士の交流は案外無い経験だった
- ・現在もSNS などを通じて、当時と変わらない関係性が継続している

そこから読み取れること

- ・異なる大学、学部、分野の学生と交流するきっかけとなり、多様な価値観、考え方を理解できるようになった
- ・時間を経た現在も交流が続いている

●チューター制度によって学生・チューター ※下記参照 にとって互いに学びがあった（学生レポーター×チューター）

- ・去年の経験を持つチューターのアドバイスがとても参考になった
- ・チューターの存在が安心感につながった
- ・昨年の自分を思い出しながら学生レポーターに寄り添いサポートした

- ・学生レポーターにとって異なる年齢・経験を持った方々との繋がりを広げる機会になった
- ・チューターにとってレポーター経験を活かして自身の新たな成長の場となった

●CSR に対する意識が変化した（学生レポーター×企業）

- ・企業がパフォーマンスではなく、強い使命を持って取り組んでいるのだと初めて知った
- ・プログラムに参加していなかったらそもそもCSR 活動というもの自体知らないままだった
- ・大学生にスポットを当てた花王の「みんなもり」の観点は珍しいし、共感する

- ・企業のCSR に対する理解が深まった
- ・消費者として商品を選ぶ際にCSR に注目するようになった
- ・自組織のCSR に注目するようになった（社会人からの声）

●新しい協働の担い手をコーディネートする仕組みを創り出すことができた（学生レポーター×日本NPOセンター（事務局））

- ・「みんなもりネーム（※下記参照）」を使って呼びあうため、早い段階でメンバー同士の親交が深まった
- ・事務局に丁寧にフォローしてもらったので安心して活動に取り組むことができた

- ・大学生と企業と市民活動団体を結ぶ経験からマルチステークホルダーによる協働の取組に幅が生まれ、数々の創発をモデルケースとして蓄積できるようになった。
- ・ネットワーク、チームワークの仕掛けが年を追うごとに磨かれた

創発が生まれるための仕掛け

●チューター制度

前年度の学生レポーター修了者を対象に事務局側となって運営に関わってもらう制度。2009年から導入。具体的には学生募集時の広報協力、取材への同行、原稿の添削など行った。学生にとっては、身近な質問を気軽に聞く相手がいることで、忙しい学生生活において活動のモチベーションを保つことに貢献した。

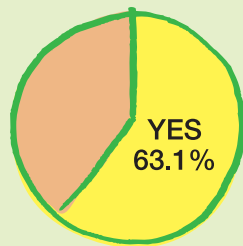
●みんなもりネーム

毎年、10名程度の学生をレポーターとして選考するが、大学はもちろんのこと、学部や学年も異なるため、自己紹介の際に「みんなもり」で活動している期間中の愛称を学生自らが決める。そのことにより、学生同士の無用な遠慮をとり、期間中のチームワーク醸成に大きく貢献した。

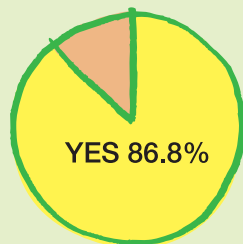


学生レポーターへの追跡アンケートの集計結果より

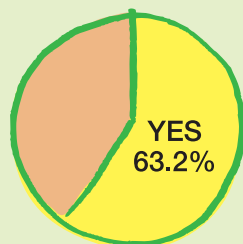
Q: 学生同士で集まるミーティングが現在のあなたの成長につながっている部分がありますか？



Q: 修了後、企業のCSR活動や社会貢献活動に対する関心が高まったと感じていますか？



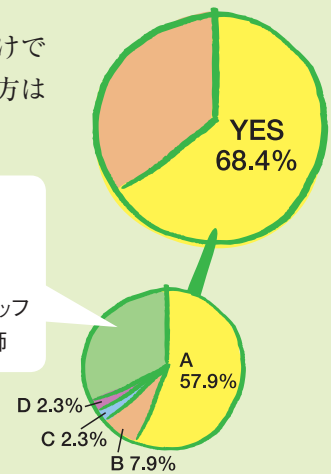
Q: 修了後、社会貢献度の高い企業の商品やサービスを選ぶようにしていますか？



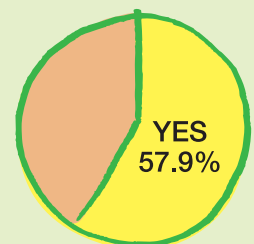
Q: この事業がきっかけで現在もつながりのある方はいますか？

(内訳)

- A. 当時の学生レポーター
- B. 訪問先の団体
- C. 日本NPOセンタースタッフ
- D. 当時のライティング講師



Q: 就職活動などで、CSRや社会貢献活動なども確認のポイントにしますか？



学生レポーターが「花王・みんなの森の応援団」に対して良かった、お勧めしたいと挙げているポイント

- 文章をこれほど丁寧にみていただける機会は、他にないと思います。記事はネットに残り続けるので、思い返したときに読むことが出来るのもよい点です。
- 学生時代に机上の授業だけでは学べない貴重な体験を養う事ができました。
- 自発的に活動することが何より大切だと思います。何のためにしているのか意識することは、物事を自分ごとにする第一歩です。学生時代にそういったことができるのは、とても貴重です。
- 知り合いが増え、森づくりや市民活動への理解が増え、執筆力・プレゼン力も増える、大変お得なプログラムだと思います。
- インターンなども増えていますが、また違った関わり方なので、面白いです。
- 6ヶ月という期間は長く感じてしまうかもしれませんが、活動参加前後のミーティングがあったおかげで良い記事が書けたし、他のメンバーとも仲良くなりました。

変化と成長を実感できるプログラム「花王・みんなの森の応援団」 まとめにかえて



萩原なつ子

認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター・副代表理事
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科・教授

ここでは本誌作成のために行ったアンケート調査の結果に対して、私なりの感想や、今後の期待などを述べていただきます。まずは、「花王・みんなの森の応援団」の企画の段階から終了にあたっての本誌作成まで、この10年間にわたり本プログラムに関らせていただいたことを心から感謝申し上げます。このきっかけを作ってくださった花王株式会社との出会いは企業の社会貢献活動という側面だけでなく、消費者のニーズに応えるべく、真摯にもつくりをする企業の本来の姿を実感することができました。そして花王と日本NPOセンターが試行錯誤を繰り返しながら実施してきた本プログラムに参加した学生たちは、この10年の日本社会の変化を映す鏡ではなかったかと思っています。たとえば10年前はまだNPOがそれほど社会的に認知されてなかったことから、応募してきた学生もそれほどNPOに対する知識は高くはなく、環境問題への意識、そして企業の社会貢献活動に対する関心も学生によって差があったように思います。ところが年を追うごとに社会のNPOの認知度、環境への関心、企業の社会貢献活動への関心が高まるにつけ、学生の応募動機の内容も社会の動向を反映したものに変わってきたように思います。いずれにせよ、毎年、前向きでチャレンジングな学生との出会いは私にとって大変刺激的で、一年足らずの活動を通して大きく成長する彼らの姿から多くを学ぶことができました。

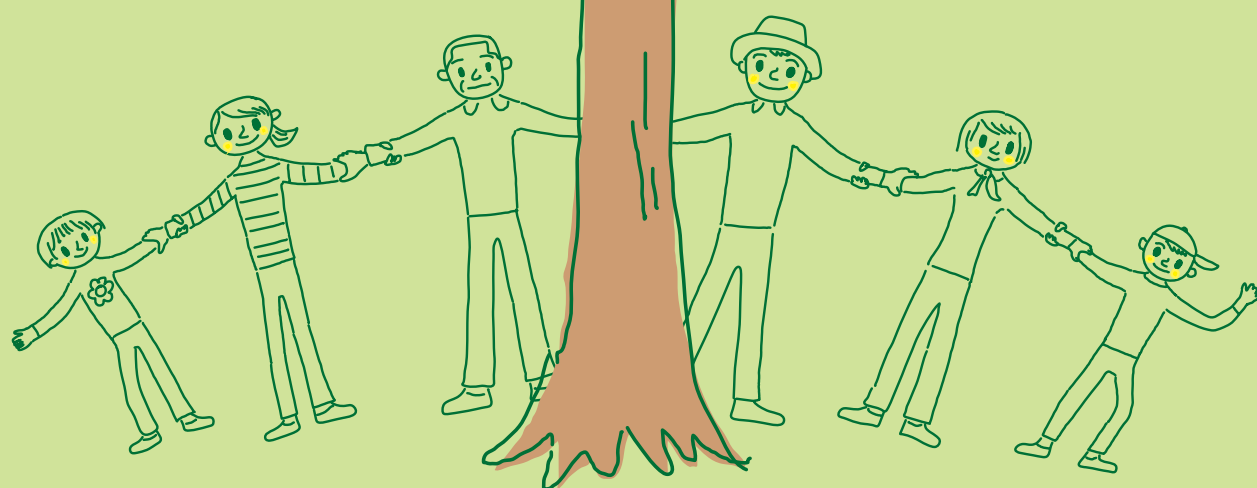
今回実施したアンケート調査からも、彼らの成長ぶりを確認することができました。学生レポーターが取材先

の団体、講師陣、他のメンバー、花王、そして日本NPOセンターなど多様な人や組織と関わることによる相乗効果で、まさにエンパワメント（本来もっている力を引き出す、力を引き出される）したということが明らかになったと思います。なによりも驚いたことは、10年経過した今も、学生レポーターが当時に得た経験・学びを大事に育み、持ち続けていることです。これは、大きな成果であり、社会的インパクトを持ち得ていると評価できるでしょう。おそらく学生と団体だけではここまで「変化」を起こすことはできず、また企業と学生と市民活動団体だけでもここまで「変化」を生み出すことはできなかったのではないのでしょうか。市民社会の立場からプログラムにかかわり全体をコーディネートするNPOと企業と学生と団体の4つのステークホルダーがよい協働をすすめたことがプログラムの目的を達成するために必要不可欠な要素であったと思います。

「花王・みんなの森の応援団」は、プログラムとしての一定の役割を終えたということで今年度をもって終了しますが、本プログラムに参加し、エンパワメントした学生レポーターたちが今後どのような活躍を見せるのか、加えて彼らのゆるやかなネットワークからどのような社会的インパクトある活動が生まれてくるのか大変楽しみです。そして、本誌をどこかで手に取った方が触発されて、「花王・みんなの森の応援団」をさらに進化させたものに展開することを期待して、私からの「まとめ」とさせていただきます。



「花王・みんなの森の応援団」 再訪問レポート



「花王・みんなの森の応援団」で過去に学生レポーターとして取材・活動を行なった皆さんの中から5名の方が、かつて訪問した市民活動団体を再度取材、また活動に参加し、当時と比較しながら「変化・成長」をテーマに記事を作成しました。

古賀市緑のまちづくりの会

市民・企業・行政・NPOの 協働が活動継続に

2010年度レポーター 坂部 布実



宿理さん(右)から現場の説明を受けるレポーター

2010年9月。当時大学3年生だった私は、福岡県古賀市で「緑を守り、育てることで豊かに住みやすいまちづくり」を目的として活動している団体、「古賀市緑のまちづくりの会」（以下、緑のまちづくりの会）に取材させていただいた。それから5年。活動現場、そして森づくりに関わる皆さんにどのような変化があったのか。再び取材するため、様々な想像を膨らませながら古賀へ向かった。



坂部 布実（さかべ・ふみ）
初回取材時：早稲田大学創造理工学部
建築学科3年
現在：東京都都市整備局所属

植樹10万本達成 それぞれの心に芽生えた 新たな「責任感」



古賀グリーンパークに10年間で10万本を植樹し、かつて竹林だった場所を地域の特性に合った広葉樹の森に再生することを目標として「古賀市10万本ふるさとの森づくり」が始まり、最初の植樹祭が実施されたのは2002年3月。緑のまちづくりの会をはじめ、古賀市、九州電力株式会社、福岡グリーンヘルパーの会などから構成される「古賀市10万本ふるさとの森づくり実行委員会」（現在は「古賀市ふるさとの森づくり協議会」に改称）が中心となり、市民や企業のボランティアに参加を呼び掛け、共に植樹祭や育林行動（植林地の草刈り作業）に取り組んできた。そして前回の取材から約半年後の2011年3月に、目標だった10万本の植樹を達成した。当時の感想をお伺いすると、「長期間にわたり活動をおこなってきたので、達成時は、それなりに喜びはあった。しかし、これで森づくりが全て終わった訳ではない。今は、達成感よりも今後も継続して育てていかなければならない責任感の方が大きい」と緑のまちづくりの会の代表、宿理英彦さんは活動継続の必要性を痛感していた。グリーンパークでの植樹祭参加者総数は約1万人、育林活動も約7,500人と古賀市最大のボランティアのサポートもあり、会員の大塚絃一さんは「応援してくださった方々の気持ちに伝えていきたい」と前向きな姿勢だ。10万本達成を機に、以前よりも会全体の士気が一層高まった印象を受けた。

責任感を持ちながらも、無理なく楽しく活動するモットーは変わっていない。毎回、作業終了後は、会員の皆さんが持ち寄ったお菓子を食べながら団らんする時間がある。私も作業後、その輪の中に加わった。この和気あいあいとしたひとときを全員で共有するか



作業終了後、団らんのひとときの様子



取材風景。緑のまちづくりの会と古賀市都市計画課の皆さんとお話を伺った

らこそ、流した汗も気持ちよく感じられるのかもしれない。会員の長谷川靖さんは、「作業後の爽快感は、他では感じられないこと」と語ったが、まさしくその通りだと実感した。同時に、苦労も喜びも分かち合う団結力は5年前と変わらず維持されていると、一緒に作業に取り組むことで改めて感じた。

これまで活動を続けることができた理由は、緑のまちづくりの会の皆さんの熱意はもちろん、市民、企業、行政、NPO、学識経験者が一体となって進めてきたことも大きい。九州電力株式会社による苗木の寄贈、古賀市は実行委員会の事務局を務め、植樹祭などの広報を担当、そして西日本短期大学特任教授の薛孝夫さんからの専門的な指導とそれぞれ役割を果たしてきた。古賀市都市計画課の佐田暁久さんは「官民協働の組織体で、長年にわたり活動を継続しているケースは珍しいのでは。緑のまちづくりの会や市民の皆さんの意識の高さに支えられてきた。行政として市民活動の意欲を持続できる後ろ盾を続けていくことが必要」と今後の責務を感じているようだ。

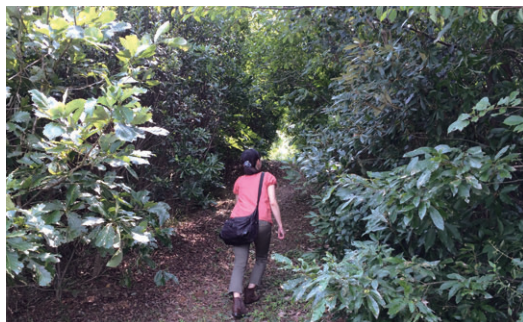
共生の森へ



緑のまちづくりの会では、グリーンパークの森を「市民にとっての憩いの森」となるよう方針を立てて活動に取り組んできた。その思いが実を結びつつあると感じたのは、今回グリーンパーク内を案内いただいた時のこと。園内の散歩を日課とする方に出会い、さらに親子で散歩している様子が目に飛び込んできた。以前の訪問時はそのような場面に出会うことはなかった。また、森が豊かになったことでウグイスがさえずり、ウサギ、タヌキやアナグマといった多様な動物たちのすみかにもなっているという。人間にとっても、動物にとっても、森が身近な存在に変化してきている。



5年前、身長と同じくらいの高さだった若木は… ↓



葉が生い茂り、森へ成長しつつあった



5年前に撮影した「花王・みんなの森づくり活動」の看板 ↓



看板は育った木々に埋まってしまった

森自体はどのような成長を遂げたのか。今回は自分の胸の高さだった若木がゆうに身長を超え、林を形成し始めていた。その成長力は想像以上で驚きを隠せなかった。逆に枯れて消えてしまった樹木もあり、自然の摂理とわかりながらも少し寂しい気持ちにもなった。もともとグリーンパークでの森づくりは、1㎡あたり約3本と密植させる方式をとっている。競争原理を活かして成長させるのがねらいだ。樹木が成長すれば、葉が生い茂り、地面への日照が少なくなるため、雑草が生えにくくなる。この方式では3年間程度、雑草は生えるが、その後は自然淘汰されていくという。その理論に基づき、昨年度まで古賀市ふるさとの森づくり協議会が主導で市民や企業のボランティアを募り、草刈り作業をおこなってきた。

現在は、緑のまちづくりの会と古賀市が契約を結び、その資金をもとに独自に森づくり活動を運営している。組織的な草刈り作業は終了したが、現場に入ると所々クズの根や若竹が生えていた。このまま放置すれば樹木の成長を阻害するため、まだ手入れが必要な状況だった。5年前と同様、緑のまちづくりの会では

毎月2回、「森づくりの日」にクズ駆除や若竹刈り、草刈り作業を通年で実施しており、それ以外の日にも自主的に活動する会員の方もいる。空に向かって大きく枝を広げる姿を見て、会員の皆さんのひたむきな努力の積み重ねに木々は応えていると実感した。

「将来のこと」ではなく 「明日のこと」



前回、緑のまちづくりの会を取材して驚いたことは、竹（孟宗竹）が他の植生の成長を阻害することだった。かつての自分は、森林の中に竹林が存在していても、単に森の一部としか思っていなかった。しかし今ではそのような光景を発見すると、この森は誰も管理していないのだろうか、放置された状態でいいのか、と思案するようになった。

日本は森林大国でありながら、近年は外材の輸入に依存し、国内の林業は衰退している。伐採する時期が到来しているのにもかかわらず放置されることによって、樹木の老齢化が二酸化炭素の吸収量の低下



5年前には存在していた木だったが(左)、自然淘汰されてなくなっていた



宿理さん(右)から若竹刈りの指導を受けるレポーター

を招き、温暖化問題にもつながっている。宿理さんは訴える。「豊富な森林資源を循環させる必要がある。若い世代の方々には、そのサイクルの仕組みを学び、考えてほしい。」

また、森づくりには後継者育成の課題もある。緑のまちづくりの会では、親子同伴の自然観察会や、地元のお祭りへの出展といったイベント企画、さらにはホームページやフェイスブックで情報を発信し、積極的に活動をアピールしている。しかし、新規会員を募るとなると、厳しい現実が立ちはだかる。入会しても、家庭内の事情や体力的な問題などが原因で長続きしない。イメージと現実とのギャップもあるのだろう。関心はあるが、世代が異なることや、自身の仕事との両立に迷い、あと一步のところ躊躇している若者もいるのかもしれない。

私の地元では、市が里山ボランティア養成の講座を開講し、参加者を募集している。チェーンソーやカマなどの道具の扱い方や、市内で活動するボランティア団体の協力のもと、現場で実践を積み、基礎的な知識や技術を養成することが目的だ。この講座の研修修了者有志が集まり、団体を立ち上げた実績もある。きっかけづくりの場が少しでも増えていくことで、新たな森づくりの輪が広がっていくことだろう。

行政も市民の一人



今、行政職に就いて思うのは、行政がきっかけづく

りの場を提供することが重要であることだ。ただし、あまりに行政主導だと、市民の意欲を向上することはできないし、逆に市民活動に対して何も支援しなければ団体の運営が困難になってしまう。会員の新町直子さんが、「森づくりは子育てと一緒に。放任しすぎるのもよくないし、かといって手をかけすぎてもよくない。関わり方が一緒」と話されていたが、それは行政と市民の関係にも共通している。関係性のバランスを保ちながら、行政も市民の一人という目線を持って動いていかなければならない。

現在の自分を振り返ると、5年前の取材が私に与えた変化は「現場へ足を運ぶこと」と感じている。社会人になった今、仕事をする上で心がけていることのひとつである。今そこで何が起きているのか、問題解決の糸口を見つけるためには、現場に入っていくことは基本中の基本であるが、その基礎を築くことができたのは、緑のまちづくりの会の取材を経験したからこそだと感じている。真実は現場にあるということ、そして住民の方々の立場になって物事を考える重要性は、今後どの職場になったとしても胸に刻み、励んでいくつもりだ。

森づくりの次世代の担い手づくりは、緑のまちづくりの会に限らず、全国各地に共通する難しい課題である。まずは問題意識を共有するため、身の周りにいる方々に森づくりの現状を伝えていくことから始めていこうと思う。そして今後も可能な限り古賀へ足を運び、緑のまちづくりの会とのご縁を大切にしていきたい。

古賀市緑のまちづくりの会

〒811-3101 福岡県古賀市天神5-11-7-505
電話：092-944-5924
代表：宿理 英彦
設立：2000年

団体概要：古賀グリーンパーク内の主として竹林を広葉樹の森に再生することを目的に会を設立。のちに企業による記念事業「古賀市10万本ふるさとの森づくり活動」と連動して公園内の植林活動を市民一般ボランティアと共にやってきた。10年で事業を達成した後も育林活動や園芸福祉（園芸作業を通して、生きがいを共有するという考え方）活動を行なっている。



宿理 英彦 代表

ご多忙の中レポートをまとめていただいた坂部さんは行政のキャリアを積んでさらに見る目を養っている方であることが分かります。しっかりと森の様子を見つめ、不明な点に対しては質問を重ね、自分なりの的確な視点で集約されていました。問題点に対する指摘もやんわりと盛り付け、最後は体験をフィードバックして職場で生かすという、我が方としても嬉しいことです。今回「花王・みんなの森の応援団」企画の日本NPOセンターさん、花王さんには感謝と共に、長期を要する環境にやさしい森づくりに視点を当て続けていただきたいと思います。

どんぐり山を守り育てる会

地域コミュニティの中で根付く、 “無理なく、楽しく、やってみる”森づくり活動

2010年度レポーター 飯田 貴也



5年ぶりの再会に話が弾みます

大阪府豊中市。JR新大阪駅から電車とバスを乗り継いで30分ほどの場所に、UR賃貸住宅「シャレール東豊中」がある。「どんぐり山」は、この前身である東豊中第一団地の頃から敷地内で保全され、長きにわたって地元で親しまれてきた、5分もあれば山頂まで登れる小高い山である。



飯田 貴也（いいた・たかや）
初回収材時：早稲田大学先進理工学部
応用物理学科3年
現在：NPO法人新宿環境活動ネット
（新宿区立環境学習情報センター
指定管理者）

「どんぐり山を守り育てる会」の発足



2004年、団地の建替えに際し、「どんぐり山」は存続の危機にあった。当初「UR都市機構（以下、UR）」に山を残す考えはなかったが、住民がURと協力して「どんぐり山ワークショップ」を開催し、多くの意見が寄せられたことが事態を動かした。一転して、URは団地のシンボルとして「どんぐり山」を残すことを決め、ワークショップ参加者を中心として住民有志で「どんぐり山を守り育てる会（以下、守り育てる会）」が発足されたのである。以降、守り育てる会によってどんぐり山の管理方針が立てられ、苗木の補植などの森づくり活動が定期的に続けられてきた。発足から10年以上が経ち、“無理せず、楽しく、やってみる”をコンセプトとした自主的な活動は今なお続いており、身近な自然を見るだけにとどまらず自分たちの手で守り育てる暮らしが、地域コミュニティの中で着実に根付いてきている。

「花王・みんなの森の応援団」 学生レポーターへの挑戦



2010年、早稲田大学の学生だった私は、「花王・みんなの森の応援団」へ応募した。東京生まれ・東京育ち、東京のキャンパスで学ぶ私にとって、かねてから環境問題に関心はあったものの、森づくりはどこか遠い存在だった。このプログラムを通じて、森づくり現場の生の声を聞くことで国内の森林保全の現状を肌で感じ、「自分に何ができるのか」を考えるきっかけにしたいと考えたのが参加のきっかけだ。

学生レポーターとして、 1度目の取材訪問（2010年）



守り育てる会の担当となった私は、同年9月に現地を訪れ、活動を体験させていただいた後、会員の方々にインタビュー取材をおこなった。守り育てる会では、定例活動として毎月1回集まり、山一帯の見まわりや清掃、林床手当てなどを実施しているとのことだった。代表の古川いつ江さんは、どんぐり山について「子ども孫も遊んだ“思い出の山”」「まわりの環境は変わっても、どんぐり山だけは今も残っている」と懐かしそうに語り、別の会員の方は「住民の『ありがとう』という言



どんぐり山の裏にあるひょうたん池の保全活動



5年前（2010年）の取材の様子

葉が嬉しい」「日頃は話す相手もない、行く場所もない。だから、（守り育てる会の活動は）自分の健康にもいい」などと笑いながら話されていた。それぞれの会員が“誰かのために”ではなく“自分たちのために”という動機で活動し、当事者意識をもって森づくり活動を楽しんでいる姿が印象的だった。一方、どんぐり山は長い間手入れしない状態が続いていたため木々の痛みがひどく、一般開放できない状況となっていた。古川さんは「今は山に入れなくても、将来的には誰もが自由に遊べるようになれば」と夢見ながらも、団地の約2/3が高齢者、守り育てる会の会員71名のうち、そのほとんどが60歳以上という現状について「いつまでやっていられるんだろう…」と不安を口にし、「今すぐにではなく、私たちが一生懸命に活動している元気な姿を見せて、若い人には何かを感じて欲しい」と語っていた。

こうした守り育てる会の地道な取り組みや会員の方々の想いを、自分の記事を介して若い世代にも発信していきたいと、意気込みを新たにレポート執筆に向き合った。

レポーターとして、再チャレンジしたい！



取材訪問から5年間、私は大学で「ESD（持続可能な開発のための教育）」をテーマに研究を進めながら、並行して新宿をフィールドとしたまちづくりや環境教育活動に取り組んできた。具体的には、商店会や地元企業らとともに、環境を切り口としたまちづくり活動として地域通貨「アトム通貨」の事務局運営に携わり、また、NPO法人新宿環境活動ネット（新宿区立環境

学習情報センター 指定管理者)では、地域の側から学校教育を支えることで、こどもたちにより豊かな環境学習をして欲しいという想いから「新宿の環境学習応援団」を結成し、小・中学校における出前授業や課外ワークショップをコーディネートしている。

こうした様々なセクターの方々と連携・協働させていただいた経験を踏まえ、1度目とは違った視点から守り育てる会を見ることができるともかもしれないという期待感から、レポーターとして再チャレンジしたいという思いが強くなった。そして何より、守り育てる会の近況を知りたい、もう一度久しぶりに古川さんをはじめ会員の方々にお会いしたいという気持ちが湧いてきたことが、最大の応募動機であった。

念願が叶い、5年ぶり2度目の 取材訪問 (2015年)



2015年7月、再訪問が実現した。取材当日は朝から小雨がちらつくあいにくの天気だったが、約束の集合時刻には雨も上がり、現地でも古川さんが手を振りながら笑顔で迎えてくださったことで不安は一掃された。「元気にしてた?」と声を掛けていただいた古川さんは

今も会員として活動に携わっていらっしゃるそうで、団地のあちらこちらから集まってくる会員の方々の顔ぶれ、鎌やエブロンなどの道具類、和気藹々としたアットホームな雰囲気など、そこには5年前と全く変わらない光景が広がっていた。唯一変わっていたのは、参加者のみなさんが「だいふ、育ってきたんだよ」「みどりが茂ってきたでしょう」と誇らしげに語る「どんぐり山」の成長だった。わずかではあるがそれでも確実に、葉の密度が高まり全体的にこんもり青々としてきた印象を受けた。5年前と同じく、1時間半ほど下草狩り作業をお手伝いさせていただいた後、団地の集会室に場所を移してインタビュー取材をさせていただいた。開口一番、「改めて、話すこともないんだけどねえ…」と遠慮気味に話す古川さんは、守り育てる会やその周辺環境の変化を「メンバーはほとんど変わらないが、引っ越しなどで(5年前の71名から)50名ほどに減った」「団地も相変わらず高齢化で、約65%がお年寄り」「若い人が家族連れで団地に入ってきて、通勤などですぐにいなくなってしまう、団体に目を向けてもらうのは難しい」と語っていた。また、丹念に手入れを続けている「どんぐり山」については「木が大きくなってきた」と成長を実感しておられる様子で、団体の方も



「どんぐり山」の見まわり



5年間の変化を現場でレクチャー



慣れた手つきで下草狩りをする会員の皆様



休憩時間にはあちこちで井戸端会議が



代表の古川さんへのインタビュー取材（一番右が古川さん）

口々に「こんなに近くで成長を見られるのは会員の特権よね」「この歳で、社会に関わっていられることが嬉しい」などと日頃の活動のやりがいを話してくださいました。それでも、どんぐり山の一般開放はいまだ実現せず、「はじめは10年で一般開放したいと言っていたが、なかなかそうはいかない」「（開放できるのは）何十年後になるかねえ」「これからも（守り育てる会の活動を）やりたい気持ちはあるけど、体がいつまで続くか。私たちがやらなければいけないんだけど…」とこぼしていた。それでも最後には、古川さんから「次は、また5年後かな!? 今度は大物になって遊びに来てね（笑）」との嬉しいお言葉をいただき、笑顔で別れを告げた。

5年越しの再取材を通して、 見えてきたもの



5年越しとなる2度目の取材で見えてきたのは、守り育てる会の変わらない姿だった。ブレない団体コンセ

プトのもと、同じメンバーによって同じ雰囲気の中で活動が継続され、森づくりという面でも着実に成果が見え始めていた。しかし同時に、守り育てる会は団地の高齢化による跡継ぎ問題に直面しており、これは全国各地で叫ばれている地域課題の典型例でもあったと感じた。

私自身、この5年間の地域活動を通して、地域や団体は「変わらないために、変わり続けなくてはならない」ということを学んだ。全国の商店会など地域振興の現場を視察させていただき、各地の地域おこしに成功したと言われる土地には、必ず「よそ者」「若者」「ばか者」の存在があることを実感した。つまり、地域の現状を変えるには、外からの客観的な視点をもった「よそ者」、しがらみなく新たなチャレンジができる「若者」、そして強い信念のもとでとことん活動に打ち込める「ばか者」が必要だということである。

国土の約7割が森林という恵まれた自然環境の日本が持続可能な社会づくりを目指すとき、守り育てる会のような地域に根差した団体の存在は重要である。しかしその前提として、持続可能な社会づくりの担い手である団体のサステナビリティ（持続可能性）を考えることも、避けて通れない。2度の取材を経て、「花王・みんなの森の応援団」プログラムへ参加した理由であった「（東京にいる）自分に何ができるのか」という問いに対する答えはまだ出ていないが、課題は明確になった。古川さんとの冗談交じりの約束である“5年後の再訪問”へ向けて“Think globally, Act locally.”を念頭に置き、新宿をフィールドにした研究や活動を続けながら、邁進し続けていきたいと思う。

どんぐり山を守り育てる会

〒560-0003 豊中市東豊中町6丁目5-2-501

電話：090-8984-3084

代表：古川 いつ江

設立：2004年

団体概要：団地の建替えに際し、存続の危機にあったどんぐり山を守ろうとする動きから発足した団体。“無理せず、楽しく、やってみる”ことを大事にしながら毎月1回、どんぐり山一帯の見廻り・清掃や林床手当て（落ち葉止めづくり）などを実施し、山の保全・育成を地域住民の手によっておこなっている。



古川 いつ江 代表

五年前にも感じたことですが今回も「飯田さんはじっと良く人の話を聞く方」（会員談）という通り私たちの山への気持をとても良く理解していただいていることが嬉しくてまた元気で頑張ろうと改めて思いました。

今、山は地域で広がりを見せているナラ枯れのため4～5本枯れてしまいましたが緑を取り戻した山のため、自分たちが集い楽しめる場所を残していくため、活動を続けていきます。

飯田さんも今回将来の方針を決められたと聞き、いつまでも純真な（外見も内面も）真心が子どもたちに伝わると思います。私達の山で出来た落ち葉の堆肥を見て生徒さんたちと一緒にこんな作業が出来る機会があったらいいのになあ…と思ひながら私もまた少し山と関わっていきます。こうした取り組みが全国に拡げればと願いつつ…

特定非営利活動法人 子どもへのまなざし

森に囲まれた子育て ——豊かな森と、大人の暖かいまなざしに触れて——

2014年度レポーター 朝崎 千秋



藤浪さん(右)とレポーター

木漏れ日が降り注ぎ、子ども達の笑い声が溢れている——1年ぶりに訪れた仲田の森^{さんし}蚕糸公園は、変わらずあたたかい雰囲気^きに包まれていた。緑いっぱいの仲田の森蚕糸公園は、日野市に位置し、特定非営利活動法人 子どもへのまなざし（以下、まなざし）の活動拠点である。今回も1年前と同じく、まなざしの理事長 中川ひろみさん、事務局長の藤浪里佳さんにお話を伺った。



朝崎 千秋（あさざき・ちあき）
初回取材時：立教大学社会学部
メディア社会学科2年
現在：立教大学社会学部
メディア社会学科3年

活動の変化



前回と同じく、子どもが主人公の遊び場を創るプログラム「なかだの森であそぼう!」取材した。「なかだの森であそぼう!」は、私が取材した去年までは、夏休み期間ということで8月には開催されていなかった。しかし、「夏休みも開催して欲しい」という声があがり、今年初めて8月にも開催することになったそうだ。私が取材した日がちょうど8月の開催日で、参加者は60人を超えていた。参加している子ども達は、みな活き活きとした笑顔で遊んでおり、とても楽しそうであった。

また、今年から新たな活動も始まった。「プレーワーカー養成連続講座」は、今年の5月から、5回に分けて開かれた講座である。この講座の趣旨は、「子どもが主人公の居場所」を創り続けるというまなざしの活動の趣旨を、大人に理解してもらうこと。講座の内容は子どもの遊びの事件事故の検証や、遊びの体験など講座ごとに違う。「この講座を通して、子どもの『あそび』の大切さを理解する大人を増やしたい」と藤浪さんは笑顔で語った。

他にも、年中・年長の子どもを対象に、そしてその親にも川遊びの魅力と危険を知ってもらう「川であそぼう!ちびっこ団」や、活動に参加した父親達をつなげ、夫婦一緒に子育てする術を学ぶ「父親学級」も開催された。

去年と比べ、新しく始まった活動は大人にも焦点があてられているように感じる。子どもの遊びを支える大人の役割はどういうものであるのか。そう考える大人が増えれば、子ども達はもっとのびのびと、自由に遊ぶことができるだろう。

前回の取材では「現状維持が今後の目標」と語った藤浪さん。今回の取材では、「目標を大きく持ちたい」と語った。現在まなざしは「プレーパーク※の通



「なかだの森であそぼう!」の様子

年開催」を目標に、日々活動している。まなざしを後押ししてくれたのは、東京近郊の様々な団体やその事務局を担う人たち。活動を発展させるためには人材育成が必要なことや、育成のノウハウを教えてくれた。その心意気に感動し、「目標を大きく持つ」ことにしたのだそうだ。

理事長の中川さんは、「新しいまなざしの試みを通して、今の子どもたちが置かれている状況を考える大人が増えていけばいいな、と思っています」と微笑みながら語った。

「本当に子どもにとって大切なことは何か」を考える輪が広がる



「以前と比べ、子どもにとって大切なことは何かを考える輪が広がりました」——まなざしを取り巻く環境の変化について問うと、藤浪さんは笑顔で答えた。この一年の間に、日野市の子育てを考えようと集まった人たち(学童・保育園のお母さんや子育て支援団体)と話す機会があったそうだ。その集まりでは、「まなざしさんのように、子どもが自由に遊び場を選択できる団体が増えればいいね」と言われたそう。今までの実績が、他の団体や保育園のお母さんに認められているからこそこの発言だ。

また、行政もまなざしの活動実績に注目している。今年策定された日野市の「新!ひのっすくすくプラン(日野市子ども・子育て支援事業計画)」では初めて「プレーパーク」という言葉が記載された。今までのまなざしの活動実績が行政にも認められた結果だ。

市民や行政から実績が認められ、お互いが関わりあうことで、本当に子どもにとって大切なことは何かを考える輪が広がっていく。まなざしを取り巻く輪が、子どもがのびのび遊び、親が子育てしやすい環境を創り始めているのではないかと私は感じた。

※プレーパーク：子どもたちの大切な遊びについて、好奇心や探究心などやりたいことができる限り実現できるように禁止事項を少なくしているあそび場のこと。(出典：大阪ボランティア協会 編『ボランティア・NPO用語辞典』)

母親達の変化



一年前と比べて、活動に参加する母親達の動きがより活発になっている。「まなざしの活動に参加してい



一年前の「なかだの森であそぼう!」の様子



仲田の森蚕糸公園の入り口



巨木手作りブランコで遊ぶ子ども

たお母さんが、自らの生活圏で新しい活動を始めています」と藤浪さん。一人のまなざし会員の母親が、「自分の子どもの生活圏では、外で遊んでいる子が少ない」ということに気づき、同じように思っている仲間を募って活動を立ち上げたそうだ。その活動は公園で遊ぼうという趣旨で、週に1回開催されている。近所の大学生たちも協力しているそうだ。まなざしでの経験が、母親の活動を後押ししたのかもしれない。

去年の秋からは、佐々木正美さんの著書「子どもへのまなざし」を読んだ母親達で語り合う読書会も、仲田の森蚕糸公園で開催されている。まなざしの活動に参加している母親だけでなく、他の幼稚園や保育園の母親も参加しているそうだ。「まなざしさんの読書会は、子育てへの意識が高い人がくる」という評判があるそう。そういった評判が更に人を呼び、どんどんと、母親達の輪は広がっている。まなざしを中心とした母親達の輪が、これからも広がって欲しい。

私の変化



「子育て中のお母さん達に、少しでも役に立つことをしたい」。一年前と比べ、そう考えるようになったのが、私の大きな変化である。一年前は、子育てについて考えたことも無かった。しかし一年前の取材を通じて、「いい母親にならなくてはいけない」という母親達のしぐらみがある事や、周りの人が親子にチクチクとし

た視線を送ることがある、という子育ての苦悩を知った。もしかしたら私も、電車内や街中で無意識にチクチクとした目線を送っていたのかもしれない。今までの行いを顧みると共に、私が母親達にできることは何だろうと考えるようになった。

私は飲食店でアルバイトをしている。まず、ベビーカーを押す母親が来たら、ベビーカーを置きやすい席を作るようにした。また、離乳食を赤ちゃんに食べさせようとする母親がいたら、食べさせやすいように小皿やスプーンを渡すようにした。子育てを経験したことのない、大学生の私ができることは本当に些細なこと。でも、母親達から「ありがとう」と言われるのはとても嬉しい。まなざしの取材を通して、子育て中の母親の実情を知ることができたのは本当に良かったと思う。これからも、子育て中の人達に自分は何ができるかを考えながら行動したい。

大学生へのメッセージ



大学生へのメッセージはありますか。そう問うと、藤



捕まえた生き物を覗く男の子



団体でつくった看板



仲田の森で作る「仲田鍋」の様子

浪さんは笑って答えた。「今って大人が多いから、失敗をする前に手を差し伸べられますよね。だけど、誰だって失敗はするものなんです。やりたい事をやって失敗しても、おしまいじゃありません。その先があります。その先にあるものを見て欲しいな」。

私自身も失敗が怖くて、やりたいことに一歩踏み出せないときがある。しかし藤浪さんの言葉を聞いて、心がスーッと軽くなるのを感じた。失敗は当たり前。失敗を通じて人は成長するのである。失敗して終わり、ではなく、失敗して成長するということを念頭に入れて、やりたいことにチャレンジしていきたい。

そして最後に、大学生活が残り1年となった私から、大学生へのメッセージ。時間がある大学1、2年生は特に、大学生活で出会わない世代の人と出会って欲しい。私の場合、普段出会わない世代はまなざしの母親達であった。子育て世代と交流をもつことで、今まで知らなかった子育ての実情が知れたし、その分視野も広がった。普段関わることの出来ない人たちと触れ合い、多様な視点を持つことは自分のスキルアップにもつながる。ぜひ他の世代と交流して、新たな視点を持ってほしい。

活動に参加して

もう一度まなざしの取材をすると決まったとき、変化は見られないだろうな、と思っていた。前回の取材から1年しか経っていないからだ。確かに、活動拠点

の仲田の森蚕糸公園には、大きな変化は見られなかった。しかし、まなざしを取り巻く変化は沢山あった。特に印象的であったのが、まなざしに参加していた母親が新たな活動を始めたということ。まなざしでの経験が、母親達を主体的に動かす力となり、徐々に子育ての輪を広げている、というのを実感した。

また、藤浪さんの大学生へのメッセージは、本当に心に響いたし、励みになった。私はこの夏初めて企業のインターンシップに参加し、何回か失敗してしまった。その時に藤浪さんの言葉を思い出すと、心の重みが消えてくのを感じた。失敗しても終わりじゃない。そう自分に言い聞かせると、積極的に自分から行動を起こせるようになった。

私はもう子どもではないが、あたたかいまなざしで私を見守ってくれる人は必ずいる。その人達のまなざしを励みにして、失敗してもめげずに、やりたい事に挑戦していきたいと思う。



ネットで遊ぶ子どもたち



中川さん(右)とレポーター

特定非営利活動法人 子どもへのまなざし

〒191-0024 東京都日野市万願寺1-25-8

電話：050-3721-1973

URL：http://manazashi2009.sakura.ne.jp

代表：中川 ひろみ

設立：2009年

団体概要：「子どもが主人公の居場所をつくろう」との想いから東京都日野市で40年近く手つかずのままだった仲田の森蚕糸公園を親たちの手によって整備。子どもたちが屋外で自由に遊ぶことのできる居場所「なかだの森であそぼう!」を定期的に開催している。また、親たちの子育てコミュニティとしての役割も担っており、母親世代からの参加も多い。



藤波 里佳 事務局長

「あなたは子どもの頃、どこで誰とどんな遊びをしましたか？」

私達の活動紹介をするときは、いつもこんな問いかけから始まります。誰もが心の中に子どもの頃遊んだ記憶があり、それが自分の土台となっているのではないのでしょうか。

「なかだの森であそぼう!」を始めて7年。当初からこだわってきたのは、「行き場所」ではなく「居場所」をつくること。普段生活している身近な場所だからこそ、子どもたちはいつもの仲間と面白いことを見つけて、思いのままに自分たちで遊びを生み出すことができるのです。なかだの森に見守られながら仲間と時間を忘れるまで遊ぶ、そんな何気ない日常の積み重ねが、子どもたちの「今」をつくっています。

よこすか市民会議「1000年の森をつくる会」

よこすかの森での成長と気づき ——「1000年の森」での再会を通して——

2014年度レポーター 村重 直佑



作業後の記念写真

去年に引き続き今年も「1000年の森をつくる会（以下1000年の会）」の代表の諏訪 芳朗さんに取材をすることになった。1000年の会は横須賀市で植樹や竹林整備、竹細工教室を開催している市民団体だ。諏訪さんはニュースで環境問題が報道されるようになったことによる環境問題への関心の高まりをきっかけに1000年の会の活動を始め、2015年で14年の月日経った。



村重 直佑（むらしげ・なおすけ）
初回取材時：早稲田大学法学部2年
現在：早稲田大学法学部3年

1年ぶりの再会



前回の取材から一年経っているのですが、この一年の団体の変化について諏訪さんに聞いてみた。すると、「あまり変わってないよ。」という答えだった。団体は設立して10年以上たって、成熟期に入りそんなに大きな変化は起きないという。植樹の活動でも、場所がなくなってきたので今後は植樹した木を育てる育樹の方向になり、竹林整備も今後は美観を意識して整備をするなど活動も過渡期に入っているということだった。

大学生との初めての出会い



約一年ぶりに諏訪さんと1000年の会の作業所で会ったが、相変わらずお元気そうだった。今回は去年体験できなかった竹林整備の作業をすることが出来た。早朝、40人前後の会員の人たちが集まり準備をしていた。私が山で竹を切るのが初めてという事で、会の人たちは私が怪我をしないように、竹の倒し方や、刃物の使い方などいろいろとアドバイスをしてくれた。1000年の会の活動に大学生が加わるのはみんなの森の応援団からきた私が初めてだそう。大学生が参加してこなかったのは積極的なアプローチをしてこなかったからだ。大学生と定年を迎えた人たちでは活動に求める価値が違うから、あえて大学生をターゲットに会員を集めようとはしてこなかったそう。

1000年の会は、あくまで定年後を楽しく過ごすための活動であるという考えが会員の中にはある。その結果、会員を集める際も近い価値観を共有している人を集めることにしていると感じた。こうした定年後を楽しんで活動するという諏訪さんの考えは去年から感じていたものだったが、会員の募集の方法にも表れていた。



いよいよ作業開始直前。ヘルメットをかぶったりして準備をする



竹の切り方を学ぶ筆者。ただ一直線に切ればいい訳では無かった



初めて実際に竹を切ってみたが、意外に竹は切りやすい

明かされる活動の思い



今回の取材で初めて見えた諏訪さんの活動に対する想いもあった。それは環境問題に対する意識だ。諏訪さんは、1000年の会の活動を「木」と「林」と「森」の漢字を使って説明してくれた。「木という漢字に一つずつ木を増やしていけば、林になるし森になる。こうやって森を増やしていきたい」と諏訪さんは語る。横須賀ではかつて緑地面積が市の6割ほどだったが、市街化が進み今では3割ほどになってしまったという。異常気象などのニュースも増え、環境に関する状況は悪化するばかりだ。

そのような状況で1000年の会では、小さな森を地域で作っていく動きが全国に広まっていけばそれは結果として大きな森になり、環境問題の解決に一步繋がると考えて、自分たちで大きな森をつくるのではなく、植樹などを行って横須賀に小さな森をつくっている様子だった。自分たちのできる範囲を理解して、大きなことを目指す姿は格好よく見えたし、真似していきたい部分だ。

世代間の自然に対する意識の差



育った社会環境が違うから、世代間によって価値観は異なってくる。それは自然に対する価値観も例外ではないと感じた。近年、山ガールが登場したり、富士山が世界遺産に登録されるなど登山などのアウトドアは注目されてきている。私も登山などのアウトドア活動を好み、環境保護活動をする諏訪さんたちも自然は好きだろうから多少は興味があるのかと思っていた。しかし、諏訪さんは私の予想以上にはっきりと「登山などをしたいという気持ちはない」と言った。諏訪さんたちは、あくまで森は育てる対象として今は見えているという。

アウトドア活動への考えの違いの背景には、私と諏訪さんの持つ環境や自然に対する意識の間に差があるのかもしれない。私のような20代の人だと、自然といえば公園や登山、海水浴などのレジャーとしての性格が強い。リラックスしたり遊んだりしようと思って自然の中に入る。一方で諏訪さんの世代だと、学生時代に学校の校庭で芋を植えたり、裏山に杉を植樹したりした。自然は自分たちの生活を維持するために必要なものだったのではないかと。自然が生活の一部になっている環境では、自然をレジャーの対象として捕えるという発想が生まれるのは難しいだろう。その意識の延長で、いまの生活を維持していくためには自然を育てる活動が必要だと考えて、1000年の会で植樹活動などを行っている。「環境」や「自然」といった言葉は、現代社会において最も重要なキーワードの一つであることは間違いない。しかし、そんな重要なキーワードにおいてさえ、世代が違えばその言葉に対する解釈や思いは別々なことには驚いた。これが性別、国籍が違えばさらに異なるのだろう。環境問題に対して世

界が足並みをそろえられないのも、これを大きくしただけなのかもしれない。相手のバックグラウンドを知れば、相手の抱く思いも少しは分かる。そうしなければ相手の発言の意味がわからないまま終わってしまう。どんな言葉であっても、そこには様々な人の様々な価値観が含まれ得るということを今回実感して、非常に新鮮で勉強になった。

変わり続ける周りの環境



様々な思いで10年以上続いている1000年の会ではあるが、順風満帆なわけではない。諏訪さんが会の課題として挙げたのは、会員の高齢化に伴う若返りだ。1000年の会ができて10年以上たつので会員の多くが60代から70代になった。体力的にきつい作業を伴う活動の維持のために、出来るだけ若くて尚且つ自分たちと価値観を共有できる60代の人に多く来てほしいという思いが諏訪さんにはある。そして、今年新たに会員を募集したところ20人ほどの人が集まった。1000年の会が設立された当初に行ったメンバー募集では100人以上が集まったことを踏まえれば、少し少なかったと諏訪さんは感じている。10年前は環境問題が大きく取り上げられ始めた頃で、多くの人が環境活動への参加を希望していた。また、NPOなどの市民活動が注目され始めたのもそのころだった。こうした時代の流れで当初は定年後に環境活動でもやろうという人が多く存在していたから人がたくさん集まったのだと諏訪さんは分析する。一方、最近では定年が65歳まで引き延ばされたり、年金額が引き下げられるなど生活を心配しなければいけないことが起きている。こうした状況では、定年後にNPOなどで活動しようとする人の数が減るのは無理のないことなのかもしれない。

そのほかにも1000年の会は時代の流れに影響されている。それは資金調達方法だ。設立当初は市から財政的な支援をもらっていたが、市の財政難とともにそれもなくなくなっていった。代わって注目され始めたのが企業によるCSR（企業が社会に対して責任を果たし、社会とともに発展していくための活動）だ。1000年の会は現在では市からではなく企業からの支援で資金を調達しているようだ。

人やお金といったことは、様々な物事に影響を与え



朝早くから集まって楽しそうに会話をする会員の人たち



切った竹は人にぶつからないように注意して倒さなければいけない

る代表的なものだ。1000年の会のような非営利の団体で定年後の人で構成されている団体は、一面では同じ趣味を持つ人の集まりであるから人の流れの影響は少ないと思っていたが、実際は影響されているのは意外だった。立場やおかれた環境に関わらず、人やお金の流れには注視することが大切だ。

私の成長



今年の私は諏訪さんから見て一年前に比べてどう見えているのだろうか。率直にその点について聞いてみると、「去年は借りてきた猫のような感じだったけど今年はそうではない。」という答えが返ってきた。確かに、この一年で一番変わったのは私と諏訪さんの関係かもしれない。今年はある程度の信頼関係がお互いに存在する。去年はお互いに初対面という事で、お互いに緊張していたのだと思う。私の場合は諏訪さんの話を聞くことで精いっぱい、諏訪さんも説明すること

に集中し、他の事に気を回せる余裕はなかったということだ。今年はそんな初めて会う人に感じる緊張感もそれほどなく進められたのは大きな変化だ。その結果かどうかはわからないが、「去年と比べて少し頼りがいがある」という言葉もいただいた。今度はとても頼りがいがあると言われるために努力したいと思う。

また、去年と比較して質問の内容が良くなったとも言われた。団体の知識が去年よりも多い事も理由の一つだと思うが、それよりも去年の反省を活かしたのが大きいと考える。去年は記事の中身を深く考えずに聞いた内容で書こうかと思っていたが、それで記事を書く際にどう描くか、何を書くかで迷い苦労した。NPOそのものの知識もなかったので、質問がバラバラになってしまったと反省する。今回は「変化」がテーマになっていた、これに沿って記事の中身を大まかに考えて質問を考えた。構成をあらかじめ考えて行く方が生産的で質問にまとまりが生まれてやりやすくなったのは素直に嬉しかった。



一年後、1000年の会の取材をした筆者

よこすか市民会議「1000年の森をつくる会」

〒239-0807 横須賀市根岸町3-3-15

横須賀 YMCA 内

電話：045-852-6208

代表：諏訪 芳朗

設立：2001年

団体概要：海洋都市である横須賀の美しい海を守るためには、海と繋がる山や森を守る必要があるという考えから植樹、竹林整備を行っている。また、竹林整備によって伐採した竹を材料にして竹細工教室を子どもたちを対象に開催しており、会員と地域との接点をもつ事業も定期的に行っている。



諏訪 芳朗 代表

取材受け入れの依頼を会のメンバーに伝えた時、会員の目に驚きと好奇の様子が伺えた、会にとってはそれ程考えてもみたことのない申し入れでした。

村重さんの報告書に接し、今回の経験をどのように体験され受け止められたのかを知り、今回の受け入れは私どもにとっても大変勉強になり、少しはお役に立てたと安心しました。

村重さんが今回の体験を通じて単に植樹作業の経験をされた以上にボランティア活動を理解され考えを発展されて、自然とのかかわり、人とののかわり、一つの集団とのかかわりを体験され理解されたことに喜びを感じます。今回の経験が、是非これからの人生に役に立つこととなればと願っています。

自治医科大学「とちぎこども医療センター」花咲jii

「変わらない」が継続につながる 花咲jiiの活動の魅力

2011年度レポーター 鈴木 美穂



立派に成長した医療センターの木々

栃木県下野市にある、自治医科大学「とちぎこども医療センター（以下、医療センター）」で活動する団体「花咲jii」に2011年に学生レポーターとして訪れ、翌年には個人的に一度ボランティアに参加した。実に3年ぶりの訪問となる。



鈴木 美穂（すずい・みほ）
初回取材時：聖心女子大学文学部
教育学科3年
現在：航空会社勤務

医療センターの建物の入り口に着くと、真夏の青空に生い茂った緑が映えていた。特に桃の木は、私たちを見下ろすほどに背が高くなり、以前にはなかった数え切れないほどの熟した実がなっていた。まさに3年の月日の経過を象徴しているかのように思えた。

今回、7月、8月と二度に渡り、月に一度の定例活動に訪れた。取材では、花咲jii副事務局長の富さんを始め、副会長である医師で子ども医療センター長の山形さん、市民ボランティアとして花咲jiiに5年余り在籍している三宅さん、永山さんにも同席頂いた。

久しぶりの活動参加



真夏の活動

集合時間の午前8時。早めに到着した人が既に作業を始めていた。決められた持ち場がなくとも、自然と作業は分担され進められていく。広大な敷地を持つ医療センターは、建物の周囲以外にも2階のバルコニーに花壇を持つ。特に夏は草木の成長が早く、雑草の手入れや木の枝の剪定など、作業量が増える。しかし「いつも通り」といった様子で、あっという間に2時間でその日の目標の作業が終了した。活動終了後には、医療センターのボランティア事務局から冷たい飲み物などが振る舞われ、暑さで疲れた体を癒してくれた。またこの日は、園芸専門家によるミニ園芸講座や苗木のプレゼントがあり、黙々と作業していた時とは打って変わってメンバーの楽しそうな笑い声が聞こえた。

活動の大変さ

植物が大きく成長するのを目にできることはメンバーにとって嬉しい反面、今まで以上に手入れに時間



初心者でも参加しやすい花壇の手入れ



活動後の楽しみ、冷たいデザートとミニ園芸講座

がかかるという問題もある。病院という特性上、消毒などの薬品を使うことには制限がある。実のなる木は本来、相当の消毒が必要であり、手をかけて管理をしなければいけない。それができないために虫が来てしまったり暑さにやられて枯れてしまったりすることは止むを得ず、例年の課題となっている。

「この木も大きくなりすぎたな。枝を切らないといけないな。」「おいしそうな実だけれど、傷んできちゃったな。」活動が終わりかけた頃こんな声が入った。花壇周辺の歩行者の安全面を考えると、長く伸びた枝の剪定が必要になり、時にはメンバーの作業の安全を考慮し専門業者に作業を依頼することもある。

医療センターを訪れる人に癒しの空間を提供し続けてきた花咲jii。4年前の取材時、見る人にとっても活動に参加する人にとってもきれいな場であるために、花壇を荒れさせないようにするための手入れが徹底されていることが印象的であった。もちろん今もその思いは変わらない。しかし、この維持管理が年々大変さを増してきているのだと感じた。自然を相手にした活動は、予想がつかず計画通りに進めることが困難であるのだ。



再訪問時の取材風景（左から山形さん、三宅さん、永山さん）

口コミで広がるネットワーク



参加メンバーの変化

ボランティア活動において度々問題視されるのが、人手不足。しかし花咲jiiにおいては、3年前と比較しても特にそのような様子は見られなかった。月一回の定例活動のボランティアメンバーは40～50名、多い時には60～70名と、むしろ以前よりも増えていた。2011年の東日本大震災の影響で福島県から栃木県下野市に移り住んだ方、自治医科大学内にあるコーヒーショップ関係の方も活動に参加しており、参加者の幅は確実に広がっていた。

ネット社会でホームページなどの媒体で情報が広がることが多い世の中で、参加の一番のきっかけが口コミであることに、正直驚いた。園芸を趣味にしているシニア世代、花咲jiiの活動の思いに共感して何か手伝いたいと思った若者、夏休みの社会見学として訪れた小中学生の親子、それぞれ違った思いを持ち集い、共に活動している。軽作業であるからこそ、高齢者であっても園芸に接点がなかった若者でも、気軽に参加できる。また毎回必ず参加しなければいけないという強制もない。活動内容、参加方法も花咲jiiの一つの魅力であり、運営を支えている要因であるのだろう。

参加メンバーの声

取材に応じてくれた永山さんは、お孫さんが医療センターに患者としてお世話になったことがあり、患者側の視点からしても、花咲jiiが提供するこの草木にあふれる場を「素晴らしい環境」と感じているという。市民としてだけでなく、患者側の視点もわかるからこそ活動により一層力が入っているのかもしれない。

また三宅さんは、退職後ボランティア活動の場を探していた際に花咲jiiと出会った。当時、ボランティアは社会貢献だと考えていたが、今では自分も楽しめる趣味になったという。定例活動に加え平日の週に2回、水遣りや雑草の手入れなども担当している。月に一度ではまかないきれない作業を担当する、会の重要な担い手だ。「きれいなお花ですね。」訪問患者が多い平日であると、作業中に声をかけられることもある。この一言も三宅さんの活動への原動力になっているのかもしれない。「これ以上、私にぴったりのボランティアはないですよ。感謝しています。」という三宅さんの言葉に、医師の山形さんも「嬉しいですね」と喜びの返答。医療センターのボランティアの受け入れ態勢がきちんと成り立っているからこそ、市民が安心して参加でき、活動を継続しやすい環境になっているのだろう。

みんなの支え



もうすぐ設立から10年

花咲jiiは2006年に設立され、来年で10周年を迎える。これまでの9年間、どのようにして運営が継続されてきたのだろうか。設立当初は造園会社が活動の中心であった。本業とは別で、休日にボランティアとして活動することに負担があったかもしれない。しかし、医療センター関係者の協力のもと、医療センター内にはボランティア室が設置されスタッフが常駐するようになり、また、仕事の合間を縫って医師や看護師が活動に参加してくれるようになった。現在の活動メンバーは、園芸のプロではない市民ボランティアの割合が、全体のおよそ7割を占めている。全国でも珍しい、造園会社と病院が連携した花咲jiiの活動は、色々な思



4年前の医療センター前の様子



緑と花の鮮やかな色が印象的な医療センター



活動に参加するボランティアメンバー

いを持ったメンバーが多方面から支えてくれているからこそ、これまで9年間の活動を継続できたのだろう。そんな活動実績が認められ、2013年に第24回「みどりの愛護」功労者国土交通大臣賞を受賞した。

変わらないのいい



花咲jiiにとっての変化とは

「年数が経っても変わらないのいい。」花咲jii副事務局長の富さんはそう語ってくれた。良いことも悪いことも、大きな変化がなく現状を維持できることが一番だという。これまでの経験から何か新しいことに挑戦しようとやることを増やすと、必ず誰かにしわ寄せが来る。新しいことを取り入れることも、活動の発展には必要かもしれない。しかしそれ以上に、今参加しているメンバーが負担を感じずにこれからも長く活動に携わってくれることが重要なのだという。この言葉に、花咲jiiのメンバーを思いやる富さんの愛情を感じた。9年間活動を続けてこられた秘訣はこの考えが

根底にあるからなのだろう。

この言葉を聞いて、現状を維持することがどれだけ大変であり、かつ大切なことであるかを感じた。私は、何事においてもさらに発展していくことが大切だと、今まで思っていた。できないことができるようになり、なかったものを手に入れられることが成長の証であり、称賛されることなのだと感じていたのだ。

私にとっての変化とは

久しぶりにお会いした富さんに、私は「学生から社会人になっても、いい意味で変わってないね」と声をかけて頂いた。

私はこの3年で学生から社会人となり働き始めた。周囲の環境が変化し社会的な立場も変わったことで、人生の中でも大きな「変化」の時期を迎えた。学生の時に比べてより社会から求められる責任が大きくなり、物事に対する考え方も変わった。私自身の中では自分の変わったことにばかりに目が行き、変わっていないことが何であるかに気が付いていなかった。「変わっていない」というのは、周りの環境が変わったとしてもそれに流されることなく、今まで持っている自分を失わず維持できているという意味があるのだと、富さんからの言葉を受けて気が付いた。

今回、「花王・みんなの森の応援団」の企画に参加し、団体の変化を見るときともに、私自身の変化を考えることができた。今まであるものを見失わずに継続し続けること、それがなによりも大切であるのだと、花咲jiiの活動から私は学んだ。

自治医科大学 「とちぎ子ども医療センター」花咲jii

〒320-0036 宇都宮市小幡1-3-16

(株)景観プランニング

電話：028-650-3030

代表：藤岡 義三

設立：2006年

団体概要：「病気で闘う子どもやその家族を元気づけ、病院に従事している医療関係者、周辺住民にも癒しの空間を提供したい」そんな思いのもと、栃木県造園建設業協会と日本造園修景協会栃木支部が中心となり団体を立ち上げ、自治医科大学とちぎ子ども医療センター周辺の花壇の植栽と整備を行っている。



富 健治 副事務局長

10年間、毎年同じことを繰り返していても、植物は生き物であり、環境や気候の変化で花付きがわるくなり枯れることもあります。継続して花を咲かせ維持することはボランティア参加者の継続的な確保と力が必要になります。

10年間経過すれば、園芸初心者もそれなりの園芸ノウハウが身につく維持管理ができることになり、園芸のベテランに変化していきます。活動のメニューを増やし活動を活性化することも大切と思われすが、同じ活動を継続し維持管理していても、活動は自然と変化・発展していくことを感じています。また、このことが園芸活動ボランティアの重要なポイントになります。



「みんなもり」 座談会



（2015年11月9日に原稿の進捗状況を共有するためのミーティングを開催。
4名のレポーターに「みんなもり」について語り合ってもらいました。）

——再訪問のお願いを電話でしたのですが、団体の皆さんはとてもよく皆さんのこと、「みんなもり」のことを覚えてくださっていて、二つ返事で了解をいただいたのですが、実際に訪問をしてみて2回目の取材・訪問はどうでしたか。

だっち：「みんなもり」という肩書を持って行ったので、歓迎してくれたし、準備もしてくださっていて貴重な経験ができたと思います。大学生とか一個人だったら、実際は、団体を訪問してもここまで一緒に活動できるのかなと思います。私は大阪に行ったので、非日常で特別な場として活動できたのかもしれない。2回目を見てしまったので、また5年後行かないとならないという気持ちになってしまいました(笑)。

みっちゃん：私は、当時大学の掲示板で偶然に「みんなもり」の募集を見つけました。環境といっても今まで専門でやったことがないし、新しい世界に入りたいと思って応募したのですが、実は、卒業後も年賀状のやり取りをしたり、互いに近くに立ち寄る際にはお会いしたこともあります。社会人となり、とっても忙しくて余裕がなかったけど、再度訪問して、その団体のこと、その地域のことをもっと好きになりました。自分の職場（空港）でも最近日本らしさの演出が盛んで、春は桜の木がたくさんあるんです。取材先の病院と同じで植物や花が有るのと無いのでは大違い。植物の力、木の力とはこれなんだなと、実感しています。

——このプログラムが大学生対象だからよかったことはありますか？

ちあき：私が訪問した団体では、「企業が大学生を後押しする形の活動ってめずらしいね」と言っていました。私自身もそうですが、大学生には企業と何かを一緒にやってみたいというニーズがあるのではないのでしょうか。一般

的に、就職活動をするまで、企業とは距離があるのではないかと感じますが、進路を考える時期なので、「みんなもり」に参加したことで、私は企業のCSRをととても意識するようになりました。

しげ：団体の方は、「小学生や中学生に竹の切り方を教えるのと違って、大学生に教えるのはこちらも身構えるよね」とおっしゃっていました。私は、今、社会保障の勉強をしていて中央省庁に就職するのを第1志望にしているのですが、ずっと先のセカンドライフについて考えるようになりましたね。私たちの時代はあのようなセカンドライフが送れるのか？うらやましいなあと思いつつ…。団体の皆さんはまだまだ本当にお元気で、趣味の枠を越えられるんじゃないかと思いました。「みんなもり」の取材・活動が自分の後々の問題意識をつくるうえで、役立っていくのではないかと感じています。

——まだまだ、話しは尽きないですが、事務局をやっていた日本NPOセンターでは、86名の学生レポーターの皆さんが、過去も含めて誰一人として途中で記事を書くのを投げ出したり、連絡が取れなくなったりしなかったことは、実はすごいことなのではないかと思っています。市民活動団体の皆さん、学生レポーターの皆さん、企業、NPOと多くの関係者がかかわるので、一番大変だったのは日程調整だったりしますが(笑)、多くの方が同じ目的に向かって進むことの楽しさを改めて実感しました。一番成長させてもらったのは私かもしれませんね。ありがとうございました。

聞き手：新田英理子

(日本NPOセンター事務局長／みんなもりネーム：えりい)

◎みんなもりネーム

飯田貴也さん……だっち 村重直佑さん……しげ
朝崎千秋さん……ちあき 鈴井美穂さん……みっちゃん

小松尚美さん

公益財団法人 都市緑化機構 企画調査部 主任研究員

「花王・みんなの森づくり活動」が支援する団体は、都市にある身近な緑を保全しながら、次世代に豊かな自然環境とそれを育む心をつないでいこうと活動する団体です。都市の緑をまもり育む活動には、地域の環境を良くする、まちを美しく安全に保つ、コミュニケーションの充実した良好な地域社会をつくり、子どもたちの心を育み居場所を提供する、社会参画の機会となり生き甲斐を創出する、といった多様な効果があります。

「花王・みんなの森づくり活動」で支援してきた団体は、どれも高い理想を持った素晴らしい活動ですが、全体的な傾向として共通した課題があります。①活動メンバーがシニア世代に偏りがち。②広報力不足。③団体の継続性。大学生を団体に派遣し、活動に参加・取材し、レポートを発表する「花王・みんなの森の応援団」は、この3つの課題を補完するプログラムであると感じています。一度、応援団の学生を受け入れた活動団体のみなさんは、異口同音に「是非、来年も来てほしい」とおっしゃいます。若い世代の参加は活動に活気と張合いを与えるようです。自分たちの活動を上手に発信できない団体に

とって、応援団の学生と一緒に汗を流しながら取材し、レポートをまとめ発信してくれることは、団体の広報となるばかりでなく、自分たちの活動の価値の再認識につながっているようです。③の「団体の継続性」については、団体メンバーの新陳代謝、世代交代が容易ではないことを意味しています。全ての団体がこの先、30年、40年と世代交代しながら活動を続けていくことは難しいかもしれません。

応援団として活動に参加した経験は、いずれの日か自分の住む地域で自ら活動を起こすことに繋がるのでは、と思っています。そのようにして「花王・みんなの森づくり活動」が次の世代へと受け継がれ、時間や地域を超えて広がっていくことを心から期待し、そうなるよう一層の努力を続けてまいります。



Organization for Landscape and Urban Green Infrastructure



こまつ・なおみ／花王との共催プログラム「花王・みんなの森づくり活動」に携わり、日本全国の様々な森づくり活動の現場を訪問している。

青木智弘さん

認定特定非営利活動法人 瀬戸内オリーブ基金 副理事長

「花王・みんなの森づくり活動」のような事業の評価は、定量的にすることが難しく、定性的な評価に重きを置かざるを得ません。その評価作業に、一石二鳥で若者の人材育成まで盛り込んでしまった、「花王・みんなの森の応援団」は、企業とNPO、加えて学生さん達の協働事例として、優れた取り組みだと私は思います。

6年ほど私は、学生のみなさんのレポーター育成に関わらせていただきました。がいて、お一人お一人は、当初、環境問題への知識はあっても、人々の営みには関心が薄いか、その逆かのどちらかです。はじめ、環境問題に知識のある方は、関わっている方々の物語が薄い記事しか書けず、逆の例も多いのです。

ところが、各地の支援活動取材し、記事にすることによって、レポーターの皆さんは自分たちの弱点を補って行きます。寡聞にして私は、このように優れた人材育成の取り組みを他に知りません。多くのボランティア活動は得てして、人とかかわり、環境とかかわり、そのいずれかを深めることしかできないのです。「花王・みんなの森の応援団」が、このように豊か

な成果をもたらすとは、私は想定していませんでした。

ヒトは生態系の一部をなし、自然、とくに日本列島のそれは、人々が関わることによってその多様性を深めます。イチヨウや田んぼの生き物たちは、私たちが先祖伝来に大切に大切にしてきたからこそ、日本で豊かに生き延び続けています。そして関わる人々たちには、その人ごとに豊かな物語があるのです。

そのことを若者の一人ひとりに、現地取材と記事作成を通じて、いわば現場を通じて学ばせ、86人の人材育成を成し遂げた「花王・みんなの森の応援団」は、私は偉業であると思っています。画期的な取り組みであるが故、ご関係の皆さんのご苦勞も多大だったと推察します。この取り組みに関わらせていただいた者として、お礼を申し上げます。



あおき・ともひろ／ボランティアとして長年、瀬戸内海一帯の緑化や環境教育支援事業に関わる。本業は、雑誌編集、インターネットの記者を経て、現在は都市公園緑地管理（団体職員）。「花王・みんなの森の応援団」では、講師として学生レポーター育成に関わり、日本の緑地の歴史と現状、取材の仕方、写真撮影、記事執筆の基本を教えた。

学生レポーター参加者と取材実績

2006年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
グリーントラストうつのみやワーキンググループ	栃木県宇都宮市	安田 崇（武蔵工業大学）
手賀沼トラスト	千葉県我孫子市	相澤 和宏（筑波大学）
特定非営利活動法人 しろい環境塾	千葉県白井市	永島 萌（武蔵工業大学）
22世紀の森づくり・神代	東京都小金井市	村川 雅人（東京工業大学）
多摩グリーンボランティア森木会	東京都多摩市	漆畑 洋輔（神奈川大学）
麻生多摩美の森の会	神奈川県川崎市	永島 萌（武蔵工業大学）
岩屋緑地に親しむ会	愛知県豊橋市	平野 温子（法政大学）
うみべの森を育てる会	大阪府阪南市	小杉 優輝（麻布大学）
櫻守の会	兵庫県宝塚市	牧村 佳代（東京外国語大学）



2007年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
和泉の森を育む会	神奈川県横浜市	安池 豊（専修大学）
関さんの森を育む会	千葉県松戸市	中村 歩（日本女子大学）
いせはら森の会	神奈川県伊勢原市	松永 知恵（国際基督教大学）
長池里山クラブ	東京都八王子市	大谷 優佳（青山学院大学）
ときがねウォッチング	千葉県東金市	長谷川 弓子（明治大学）
藤沢グリーンスタッフの会	神奈川県藤沢市	岡田 航（早稲田大学）
つるがしま里山サポートクラブ	埼玉県鶴ヶ島市	酒匂 真理（立教大学）
横浜自然観察の森友の会雑木林ファンクラブ	神奈川県横浜市	上田 真梨子（法政大学）



2008年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
池の沢に蛍を増やす会	東京都八王子市	大谷 智実（東京薬科大学）
囲いやま森の会	千葉県松戸市	相原 翔一（東京大学大学院）
特定非営利活動法人 境川の斜面緑地を守る会	神奈川県相模原市	二宮 美音（法政大学）
里山ねっと赤坂	宮城県仙台市	小澤 智美（日本女子大学）
多摩緑地保全地区こもれびの会	神奈川県川崎市	田口 瑠奈（立教大学）
なな山緑地の会	東京都多摩市	小島 佑貴（東京歯科大学）
日向山うるわし会	神奈川県川崎市	鯉沼 信吾（日本社会事業大学）
福岡グリーンヘルパーの会	福岡県前原市	鈴木 恵子（青山学院大学）
特定非営利活動法人 みどりと花の大地学園	福島県南相馬市	成川 幸（早稲田大学）
特定非営利活動法人 やまんばの会	滋賀県米原市	岡田 航（早稲田大学）



※学生レポーターの所属は参加当時の情報です。
 ※二年連続同じ学生レポーターが1名いるため、
 87団体に対し、86名となっています。

2009年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
特定非営利活動法人 ネットワークみどり緑	新潟県三条市	本橋 孝昭（東京理科大学）
森の自然学校助川山保全くらぶ	茨城県日立市	吉田 歩未（法政大学）
栗野の森の会	千葉県鎌ヶ谷市	石原 光訓（早稲田大学）
丸山サンクチュアリ	千葉県船橋市	田邊 武志（専修大学）
東久留米自然ふれあいボランティア	東京都東久留米市	天野 佑香（横浜市立大学）
港北ニュータウン緑の会	神奈川県横浜市	岡本 妹（駒沢大学）
新林公園みどりの会（旧・新林公園愛護会）	神奈川県藤沢市	原 恵美（東京女子大学）
みどりのまちづくりグループ	愛知県春日井市	土屋 友美賀（一橋大学）
特定非営利活動法人 すいた環境学習協会	大阪府吹田市	阿部 紘士（神奈川大学）
特定非営利活動法人 根来山げんきの森倶楽部	和歌山県岩出市	白井 莉々奈（武蔵野大学）



2010年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
北の里山の会	北海道札幌市	金子 健次（一橋大学）
赤羽緑地を守る会	茨城県日立市	萩尾 奈緒香（筑波大学）
盛人の会	埼玉県川口市	松岡 美由紀（創価大学）
仏子山親緑会	埼玉県入間市	中山 惇（東京大学）
三輪みどりの会	東京都町田市	大久保 雄平（立教大学）
上郷森の会	神奈川県横浜市	小松 美由紀（東京農工大学）
相模原こもれび	神奈川県相模原市	吉田 健一（千葉大学）
縄文楽校	静岡県浜松市	岸本 真理加（恵泉女学園大学）
どんぐり山を守り育てる会	大阪府豊中市	飯田 貴也（早稲田大学）
古賀市緑のまちづくりの会	福岡県古賀市	坂部 布実（早稲田大学）



2011年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
自治医科大学とちぎ子ども医療センター花咲jii	栃木県宇都宮市	鈴井 美穂（聖心女子大学）
特定非営利活動法人 新里昆虫研究会	群馬県桐生市	大津 玲（上智大学）
ひだか憩いの森サポートクラブ	埼玉県日高市	小野 瑠沙（獨協大学）
特定非営利活動法人 里山環境プロジェクト・はとやま	埼玉県比企郡鳩山町	内田 由花（法政大学）
四季の会	千葉県松戸市	仁平 美紅（津田塾大学）
いちかわ里山倶楽部	千葉縣市川市	定保 慧（首都大学東京）
フレンドツリーサポーターズ	東京都多摩市	田上 寧奈（慶應義塾大学）
東大和市狭山緑地雑木林の会	東京都東大和市	柳 めぐみ（成蹊大学）
倉沢里山を愛する会	東京都日野市	伊藤 綾香（首都大学東京）
特定非営利活動法人 かなざわ森沢山の会	神奈川県横浜市	劔持 あゆみ（上智大学）



学生レポーター参加者と取材実績

※学生レポーターの所属は参加当時の情報です。
※二年連続同じ学生レポーターが1名いるため、
87団体に対し、86名となっています。

2012年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
取手市里山・谷津田保全「いもりの里」協議会	茨城県取手市	小口 翔平（千葉大学）
結城里山の会	茨城県結城市	麻生 茉那（東京大学）
特定非営利活動法人 こが里山を守る会	茨城県古河市	高橋 勇貴（東京都市大学大学院）
一本杉公園みどりの会	東京都多摩市	山田 万莉菜（東京薬科大学）
逗子名越緑地里山の会	神奈川県逗子市	宮武 真優（横浜国立大学）
協働参加型めぐりの森づくり推進会議 「自然ふれあい楽校」グループ	神奈川県横須賀市	笹野 百花（東京大学）
ネイチャークラブ東海	愛知県瀬戸市	小島 桜子（東京外国語大学）
ナシオン創造の森育成会	兵庫県西宮市	市木 祥子（お茶の水女子大学）
山田の里グリーンクラブ	兵庫県神戸市	水野 佑亮（明治大学）
みくまりの森サポートクラブ	広島県安芸郡府中町	内村 美沙季（早稲田大学）



2013年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
苫東・和みの森運営協議会	北海道苫小牧市	中村 翔太郎（早稲田大学）
化女沼2000本桜の会	宮城県大崎市	織内 薫（お茶の水女子大学）
常陽森のボランティア	茨城県茨城町	沼田 真奈（東京農業大学）
橘山（田口町）憩いの森愛護会	群馬県前橋市	細川 真理絵（東京学芸大学）
特定非営利活動法人 国分寺市にふるさとをつくる会	東京都国分寺市	金澤 悠花（東京農工大学大学院）
金谷山さくら千本の会	新潟県上越市	阿部 千穂子（上智大学）
特定非営利活動法人 里豊夢わかさ	福井県若狭町	河野 りさ（青山学院大学）
やす緑のひろば	滋賀県野州市	山本 洋平（青山学院大学）
豊能町コピスクラブ	大阪府豊能町	渡部 彩香（筑波大学）
自由の森遊歩道を守る会	福岡県宗像市	谷内 悠介（中央大学）



2014年度

団体名	所在地	レポート・記事執筆
加治丘陵につつじを植え戻す会	埼玉県入間市	上出 櫻子（国際基督教大学）
市川山季の会	千葉県市川市	加藤 優佳（津田塾大学）
光風台 花と緑の会	千葉県市原市	荒川 千夏（麻布大学）
四街道さつき幼稚園里山クラブ	千葉県四街道市	ハツ井 弘樹（東京農工大学）
府中市立南白糸台小学校 「せせらぎ広場」運営協議会	東京都府中市	安部 雄大（東京大学大学院）
特定非営利活動法人 子どもへのまなざし	東京都日野市	朝崎 千秋（立教大学）
南丘雑木林を愛する会	東京都日野市	篠田 佳南（日本女子大学）
くにたち桜守	東京都国立市	矢作 薫（中央大学）
特定非営利活動法人 日本の竹ファンクラブ	神奈川県横浜市	守井 英美子（成蹊大学）
よこすか市民会議1000年の森をつくる会	神奈川県横須賀市	村重 直佑（早稲田大学）



NPOと企業が結ぶ 次世代、異世代、森づくり

「花王・みんなの森の応援団」の軌跡

発行日 2015年12月25日

◎編集・発行

認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター
花王株式会社

◎問い合わせ先

認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター
〒100-0004
東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル245
TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856
<http://www.jnpoc.ne.jp/>

◎デザイン／イラスト 出口 城 (GRAM)

◎印刷 株式会社 美巧社

◎本書について、感想・コメントをお寄せください

E-mail feedback@jnpoc.ne.jp

FAX 03-3510-0856





NPOと企業が結ぶ 次世代、異世代、森づくり

「花王・みんなの森の応援団」の軌跡



日本NPOセンター

